

# 広域分布する異形土器

西村 広経

## 要旨

縄文時代後期中葉から後葉にかけて日本列島東北部では各種の異形土器が土器型式圏を越えて広域的に分布することが知られている。しかし、後期中葉の土器型式併行関係については研究者間で認識に齟齬があり、地域横断的な研究は低調である。本稿では筆者の広域編年案に準じて異形土器の時空間的分布を分析し、地域間関係の把握を試みた。分析対象としたのは異形台付土器と釣手／香炉形土器である。これらの異形土器は加曽利 B2 式併行期に出現する。両器種ともに分布が集中する下総台地周辺で成立したものと考えられ、時間をおかず道央から中部高地に至るまで分布域を広げる。曾谷式併行期までは広域的な分布が認められるが、安行 1 式併行期以降、東北北部では釣手／香炉形土器が、関東東部では異形台付土器が残存する。両器種が成立する加曽利 B2 式併行期は北海道・東北では斉一的な土器様相を呈し、関東・中部では地域性が顕在化する時期である。両器種ともに活発な型式間交渉が想定される時期・地域において成立し、土器様相の斉一化と軌を一にして北海道・東北に分布範囲を拡大したものと考えられる。後期後葉には土器型式が分立し、各地域の独自性が強まる中で、地域ごとに選択された器種が残存する。異形台付土器および釣手／香炉形土器の成立・展開・消長は土器型式分布圏の変遷と連動しており、広域的な地域間関係を反映しているものと考えられる。

## 1. はじめに

縄文時代後期中葉には日本列島東北部<sup>1)</sup>各地で各種の異形土器が出現する。後期中葉は列島東北部一円で土器様相が斉一化することが知られている(野口・安孫子 1981)。先行する時期とは型式間交渉のあり方が変化しているとみられ、各種異形土器は広域的な関係性の変化の中で出現している可能性がある。

しかし、後期中葉を対象とした広域的研究は低調であり、その背景には土器編年の整備が不十分なことがある。異形土器については中村耕作らによる集成研究があるが(中村編 2013)、集成は地域ごとに行われており地域間関係にはほとんど言及されていない。

筆者は北海道・東北における後期中葉土器群の編年に取り組んでおり、土器型式間の併行関係を明示した編年案を提示した(西村 2018, 印刷中)。本稿では筆者の編年案に基づいて各種異形土器の時空間的位置を検討する。本稿で扱う異形土器は広域的分布が知られる異形台付土器、釣手／香炉形土器の 2 種である。釣手土器、香炉形土器はいずれも鉢形の体部上面を覆うブリッジ状／ドーム状の構造を有する土器である。地域間で異なる名称が用いられているが、形態の共通性から同一器種として扱い、名称も釣手土器に統一すべきという蜂屋孝之の指摘がある(蜂屋 2004)。一方で、東北では晩期例も含めて香炉形土器という名称が定着しているという実態もある。本稿では両者を同

一器種として扱い、釣手／香炉形土器と呼称する。

これらの土器型式分布圏を越えて共有される異形土器を通じて該期の地域間関係について考察する。

## 2. 先行研究と問題の所在

### 2-1. 異形台付土器に関する先行研究

異形台付土器は「脚台があり通常の土器とは著しく形態が異なる土器」とされる(内田 1978)。台付壺形ないし台付鉢形で、体部に 1 対ないしそれ以上の穿孔が施される。穿孔部は注口状に突出する場合が多い。

名称については有孔台付土器・異形土器・奇形土器・台付異形土器など様々なものがあるが、内田儀久(1977)による井野長割遺跡出土例の紹介以降は異形台付土器の名称がほぼ定着している(小倉 2008)。

昭和初期にはすでに存在が知られており、埼玉県真福寺貝塚出土例(杉山編 1928)や千葉県遠部台遺跡出土例(池上 1937)などの報告例がある。杉山編(1928)では北海道手宮出土の異形台付土器が紹介されており、分布が広域に及ぶことが知られていた。

異形台付土器の系譜について最初に言及したのは山内清男である。山内は真福寺貝塚出土例について「加曽利 B 式以来多くの変遷を経て甚だ奇形化したもの」(山内 1940)であるとして系統をたどれる土器であるとの認識を示している。

異形台付土器を最初に体系的に論じたのは内田儀久である。内田による一連の研究によって、関東に

おける変遷が概ね明らかにされている（内田 1978, 1984）。また、鷹野光行は千葉県祇園原貝塚出土例を中心に 9 段階の変遷を設定した（鷹野 1978）。内田や鷹野の研究では、異形台付土器は加曽利 B2 式期に出現し、晩期初頭まで継続するとされている。

蜂屋孝之は異形台付土器の終焉は概ね晩期前葉だが、晩期中葉に下る可能性のある資料も存在することを指摘している。（蜂屋 2008）。

近年では後・晩期の集落遺跡で大規模な発掘調査が実施され異形台付土器の出土例は飛躍的に増加しており、中村耕作らにより集成されている（蜂屋 2013a；中村 2013a；平原 2013a；菅沼・宮内 2013）。なお、中村編（2013）の集成では北海道が対象となっていない。

筆者は東北の異形台付土器を関東のものと比較し、文様施文原則に差異が認められることを指摘した。東北の出土例は模倣製作である可能性が高い（西村 2016）。

異形台付土器の機能・用途についても多くの研究がある。胴部に穿孔を施すことから実用的なものではないという認識が定着している（小倉 2008）。液体容器には適さない特殊な形態と出土状況から内田は燻煙機能をもつ土器であるとしているが、燻煙の痕跡が認められないこと、燻煙の方法、材料、香炉形土器との関係などの問題点をあげている（内田 1985）。

出土状況については、住居跡床面での出土例が多いことが指摘されている（内田 1986；中村 2013b；平原 2013a）。

東京都広袴遺跡や井野長割遺跡、祇園原貝塚などでは住居跡床面から完形品が 2 個体出土していることから 2 個 1 対で使用された可能性が指摘されている（清水・鈴木編 1974）。また、東京都吉祥山遺跡では住居廃絶後の覆土中から完形の注口土器などを伴って出土していることから、住居跡の埋没過程で行われた儀礼的行為に関係するものと考えられている（内田 1986）。

大型住居跡である千葉県加曽利貝塚 112 号住居跡<sup>2)</sup>では完形 2 個体が床面から出土し、さらに 1 個体が破片の状態で出土している。この住居跡の床面には焼土が散在していることから、阿部芳郎は大型住居に複数のグループが集まりグループごとに炉を囲んで儀礼を行ったのであり、異形台付土器はそうした儀礼に関係するものと解釈されている（阿部 2001）。

## 2-2. 釣手／香炉形土器に関する先行研究

釣手土器は中期の中部高地にもみられるが、本稿で扱う後期中葉以降の一群との関係は明らかになっていない。本稿で釣手／香炉形土器という場合、中期の資

料は含まない。

釣手／香炉形土器を初めて扱ったのは八幡一郎である。八幡は中期から後期にわたる出土例を集成し形態によって分類している（八幡 1937）。

蜂屋孝之による一連の集成研究で後期の釣手／香炉形土器の存在様態は概ね明らかにされている（蜂屋 2004, 2005, 2013b）。蜂屋によれば釣手／香炉形土器は加曽利 B2 式期に突如出現し、後期後葉には終焉を迎えるとされる。分布は関東東部を中心とし、特に千葉県域での出土例が圧倒的に多い。出現時期と分布が異形台付土器と重なることが指摘されている（蜂屋 2013b）。また、集中的に出土する遺跡があることが指摘されている（中村 2008）。

東北の出土例について、蜂屋は瘤付土器第 I 段階以降の所産とした上で、曾谷式期以降に関東からの影響で成立したものとしている（蜂屋 2004）。

平原信崇は東北に後期中葉の香炉形土器が存在することを指摘し、蜂屋（2004）の想定する関東からの影響で後期後葉の香炉形土器が成立するという変遷には位置づけられない資料であることを指摘している。平原によれば東北の香炉形土器は後期末まで認められるが、後期末～晩期初頭の確実な出土例は非常に少ないため、晩期の香炉形土器への詳細な変遷は現段階では把握できないとしている。分布については東北全域で認められるが、東北部に偏在し特に新井田川・馬淵川流域に集中することが指摘されている（平原 2011, 2013b）。

岡本洋は青森県川原平 (1) 遺跡の人面付香炉形土器について検討しており、人面付例が後期後葉から晩期中葉まで継続するとしている（岡本 2018）。

釣手／香炉形土器の機能・用途については、中期の釣手土器にススが付着する例が多いことから灯火具とされる場合が多い（中村 2008）。

中期の釣手土器は完形個体が竪穴住居跡で出土する例が多く、住居廃絶儀礼に用いられたという見解も提示されているが（中村 2013b）、後期の釣手／香炉形土器は関東では破片での出土が大半であることが指摘されている（中村 2008）。一方で、東北部では竪穴住居跡床面から完形個体が出土する例が一定量あり、釣手／香炉形土器の用途を反映している可能性がある（平原 2011）。

## 2-3. 研究上の問題点

本稿で対象とする各器種についてはすでに集成研究が行われており、いずれの器種も土器型式圏を越えて広域的に分布することが明らかにされてきた。ただし、北海道については悉皆的な集成が行われておらず、分布範囲の北限を十分な精度で把握できているとはい

えない。

時間的な消長については各地域で把握されているものの、地域間の関係については明言されていない。例えば、異形台付土器は関東では加曽利 B2 式期に（蜂屋 2013a）、東北では丹後平式～十腰内 3 式期に出現したとされる（平原 2013a）。それでは、両地域での出現は同時なのだろうか。あるいは、いずれかの地域が先行するのだろうか。これまでの研究状況では、言及し難い問題である。なぜなら、両地域の土器型式併行関係について研究者間で見解の一致をみていないからだ。例えば、東北北部の十腰内 3 式については加曽利 B2 式併行とする見解と（関根 2005）、加曽利 B3 式併行とする見解とがある（小林 2015）。土器編年研究の不備を背景として、広域分布する資料であるにも関わらず、地域間の対比が困難な現状がある。

異形土器の機能・用途については一般的な容器とは考えられず、儀礼に関連する器物であるとの見方が強い。一方で、大塚達朗は島根県京田遺跡で出土した異形土器片の分析を通じて、異形土器を儀礼に関する器物とみなすことに異を唱えている。大塚によれば異形土器は土器製作の見本となるものであり、文様を媒介するモジュールとしている（大塚 2019）。

是非はともかくとして、従来の研究にはみられない視点であり、アプリオリに儀礼に関連する器物ととらえるべきではないという点で重要な指摘である。明ら

かに土器型式圏を越えて分布する以上、型式間交渉のあり方との関連を視野に入れなければならない。

いずれにせよ、研究の前提となるのは時空間的分布状況の把握である。

3. 研究の方法

3-1. 後期中葉～後葉の土器型式編年

本稿の分析は、後期中葉については筆者の広域編年案に基づく（西村 2018, 印刷中）。また、後期後葉から晩期初頭については阿部明義、小林圭一の編年案を参照した（阿部 2008；小林 2015, 2018）。表 1 に土器型式間の併行関係を示した。分析対象とする時間的範囲は加曽利 B1 式併行期から安行 2 式併行期である。ただし、一部晩期初頭の資料を含む。便宜上、加曽利 B1 式併行期を 1 期、加曽利 B2 式併行期を 2 期、加曽利 B3 式併行期を 3 期、曾谷式併行期を 4 期、安行 1 式併行期を 5 期、安行 2 式併行期を 6 期、安行 3a 式併行期を 7 期とする。時期・地域によっては細分が可能であるため表中にも示したが<sup>3)</sup>、細分時期間の併行関係は必ずしも表と一致しない。

なお、後期中葉の北海道については道央部の資料に基づく編年案を提示した（西村 印刷中）。表中の N30-10 層式は札幌市 N30 遺跡 10 層出土土器を標式として筆者が設定した土器型式である。鯨潤式は頸部文様帯の出現を基準として細分している。道南部につ

表 1 縄文時代後期中葉～後葉の土器型式編年表（阿部 2008；小林 2015, 2018；西村 2018, 印刷中に基き作成）

				関東東部	東北		北海道	
					東南北部	東北北部	道南	道央
後期	中葉	1 期		加曽利 B1 式	後期中葉第 1 段階 ／加曽利 B1 式	後期中葉第 1 段階	(N30-10 層式)	N30-10 層式
		2 期	2a 期	加曽利 B2 式 (古段階)	後期中葉第 2 段階		(手稲式)	手稲式
			2b 期	加曽利 B2 式 (新段階)			(鯨潤 1 式)	鯨潤 1 式
		3 期		加曽利 B3 式	後期中葉第 3 段階		(鯨潤 2 式)	鯨潤 2 式
	後葉	4 期	4a 期	曾谷式	瘤付土器第 I 段階 (古)		(エリモ B 式)	エリモ B 式
			4b 期		瘤付土器第 I 段階 (新)		堂林式 (古)	
		5 期	5a 期	安行 1 式	瘤付土器第 II 段階 (古)		堂林式 (中)	
			5b 期		瘤付土器第 II 段階 (新)		堂林式 (新)	
		6 期	6a 期	安行 2 式	瘤付土器第 III 段階		湯の里 3 式	三ツ谷式
			6b 期		瘤付土器第 IV 段階		御殿山式	
晩期	初頭	7 期	7a 期	安行 3a 式	大洞 B1 式		大洞 B1 式／東山 1a 式	
			7b 期		大洞 B2 式		大洞 B2 式／東山 1b 式	



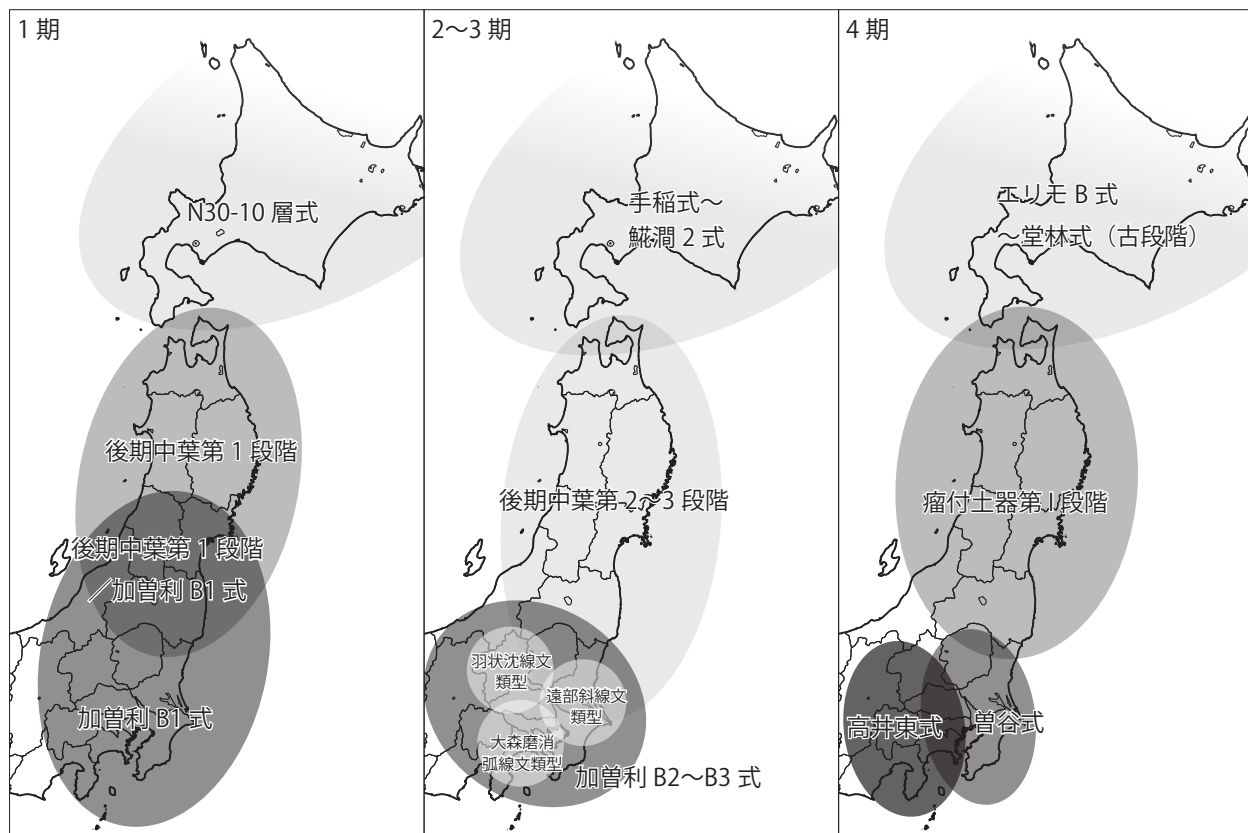


図1 縄文時代後期中葉における土器型式分布圏の変遷概略図

いては道央部の編年案を準用している。道南部の編年については別稿にて検討する予定であり、今後見解を修正する可能性がある。

筆者の編年案では後期中葉～後葉にかけて土器型式分布圏が大きく変容すると考えている(図1)。1期の東北は後期前葉段階と比較すると斉一性が強まり、東北全域に系統を同じくする土器(筆者が設定した後期中葉第1段階)が分布するようになる。一方で、加曽利B1式系の土器は仙台湾周辺から秋田／山形県境あたりを北限として東北南部に広く分布する。したがって、1期の東北南部では東北系土器と加曽利B1式系の土器が混在しており、両者は主客を分かち難い。筆者は後期中葉土器群については併存する系統の組み合わせによって「地方差、年代差を示す年代学的の単位」(山内1932)としての土器型式を定義する方法を採っており、1期には東北北部、東北南部、関東・中部にそれぞれ土器型式を設定することができる。

2期には東北全域にほぼ同一内容の土器群が分布し、関東系土器の分布もほとんど認められなくなることから、単一の土器型式圏ととらえられる。また、北海道の手稲～鮎瀬1式とも酷似した型式内容であり、広い範囲で土器群の斉一性が強まる。一方で、関東・中部の加曽利B2式土器には地域性が顕在化し、遠部斜線文類型、大森磨消弧線文類型、羽状沈線文類型が分立する(秋田2006)。

4期には北海道で突瘤文によって特徴づけられるエリモB式・堂林式(古段階)が成立する。これらは東北の瘤付土器第I段階とは異なる内容の土器群であり、北海道、東北の間で再び地域性が強まったものと理解できる。関東・中部では地域性がより明確になり、曾谷式、高井東式が分立する。

5～6期には概ね4期の枠組みが継続し、晩期に至る。

### 3-2. 分析の対象

分析対象とする異形台付土器、釣手／香炉形土器は以下のように定義する。

異形台付土器は「台付壺形、台付鉢形を呈し、体部に1対ないしそれ以上の開口部を有する土器」である。対にならない穿孔や透かし彫りのみを有する資料は対象外とする。注口状突出部など特徴的な部位であれば破片資料であっても分析対象とする。台部破片など他の器種との識別が困難な資料は対象外とする。

釣手／香炉形土器は「体部が鉢形ないし台付鉢形を呈し、上面にブリッジ状の釣手部が付される土器」である。釣手部の存在を認定要件とし、釣手部破片は分析対象とする。また、ブリッジ状の釣手부를有する注口土器が少数認められるが、釣手／香炉形土器の一種と判断し分析対象に含める。

なお、釣手／香炉形土器の形態については釣手部に





図9 異形土器出土遺跡の位置（図中の番号は表2～5の遺跡番号に対応する。）

よる空間分割に基づいて第Ⅰ～Ⅳ種に分類する方法が考案されている（宮城 1982）。分類群ごとに時期的・地域的な偏在性も指摘されているが（蜂屋 2004）、本稿では釣手／香炉形土器総体としての存在様態を把握することを目的とするため、形態による分類は行わない。

日本列島東北部全域を対象として異形台付土器、釣手／香炉形土器の集成を行う。先行研究において異形土器が集成されている中部高地および新潟県域も集成範囲に含めている。

対象とする時間的範囲は後期中葉～後葉（本稿の 1～6 期）である。したがって、亀ヶ岡式の香炉形土器は対象としない。ただし、異形台付土器終末期の資料は破片では時期の特定が困難な場合もあり、安行 2

～3a 式にかけての資料も集成した。そのため、一部 7 期の資料を含んでいる。

本州島については中村耕作らの集成を基本とし（中村編 2013）、原著報告を確認の上本稿の分析対象に該当するものを一覧表（表 2～5）に加えた。北海道および 2013 年以降に報告された資料については独自に集成した。

集成の結果、道央から中部高地にかけての 212 遺跡（図 2）において異形台付土器 641 点、釣手／香炉形土器 722 点を確認した。

各遺跡における出土個体数・時期を表 2～5 に示した。時期については細別時期の判断が困難な破片資料や、文様や共伴遺物のような判断の根拠を欠く資料も多数ある。そのため、時期ごとの個体数を明示する

表2 異形土器出土遺跡一覧表(1) (文献番号は末尾の異形土器出典に対応)

遺跡 番号	遺跡	都道府県	市区町村	異形台付土器							釣手／香炉形土器							文献
				個体数	1期	2期	3期	4期	5期	6期	個体数	1期	2期	3期	4期	5期	6期	
1	キウス4遺跡	北海道	千歳市	0							21				○	○		1/2
2	キウス7遺跡	北海道	千歳市	1		○					0							3
3	末広遺跡	北海道	千歳市	1				○			0							4
4	美々4遺跡	北海道	千歳市	0							1				○			5
5	手宮	北海道	小樽市	1		○					0							6
6	忍路土場遺跡	北海道	小樽市	4		○	○				4		○					7
7	野田生1遺跡	北海道	八雲町	1				○			0							8
8	矢不来7遺跡	北海道	北斗市	1		○					0							9
9	水木沢遺跡	青森県	むつ市	1				○			3					○		10
10	大湊近川遺跡	青森県	むつ市	0							6					○	○	11
11	鞍越遺跡	青森県	むつ市	0							1					○		12
12	上尾駁(2)遺跡	青森県	六ヶ所村	0							1					○		13
13	ニツ石遺跡	青森県	今別町	0							1				○			14
14	尻高(4)遺跡	青森県	外ヶ浜町	0							3				○	○		15
15	新田(1)遺跡	青森県	青森市	0							1					○		16
16	蛭沢遺跡	青森県	青森市	0							1					○		17
17	上野尻遺跡	青森県	青森市	0							1						○	18
18	砂沢遺跡	青森県	弘前市	0							1					○		19
19	小森山東部遺跡	青森県	弘前市	0							1				○			20
20	川原平(1)遺跡	青森県	西目屋村	0							7				○	○	○	21-23
21	酒美平遺跡	青森県	八戸市	0							1		○					24
22	丹後平(2)遺跡	青森県	八戸市	1		○					0							25
23	田面木平(1)遺跡	青森県	八戸市	0							1		○					26
24	風張(1)遺跡	青森県	八戸市	1			○				11				○	○		27-30
25	鳥谷遺跡	青森県	南部町	0							1						○	31
26	泉山遺跡	青森県	三戸町	0							1					○		32
27	上野場3遺跡	岩手県	軽米町	0							1						○	33
28	長倉I遺跡	岩手県	軽米町	2				○			14				○	○	○	34
29	板子屋敷3遺跡	岩手県	軽米町	0							1					○		35
30	吠屋敷II遺跡	岩手県	軽米町	0							2					○		36
31	君成田IV遺跡	岩手県	軽米町	0							1					○		37
32	大日向II遺跡	岩手県	軽米町	2				○			18				○	○	○	38/39
33	馬場野II遺跡	岩手県	軽米町	1				○			2				○			40
34	駒板3遺跡	岩手県	軽米町	0							4					○		41
35	椈の木遺跡	岩手県	一戸町	1			○				0							42
36	吉田館遺跡	岩手県	一戸町	1				○			1				○			43
37	沼久保遺跡	岩手県	一戸町	0							1					○		44
38	水神遺跡	岩手県	八幡平市	0							2						○	45
39	川目A遺跡	岩手県	盛岡市	9		○	○				10		○	○				46
40	浜川目沢田I遺跡	岩手県	山田町	0							1		○					47
41	立石遺跡	岩手県	花巻市	3		○	○				0							48
42	上鷹生遺跡	岩手県	大船渡市	0							1				○			49
43	河崎の柵掘定地	岩手県	一関市	2		○	○				0							50
44	寒沢遺跡	秋田県	北秋田市	1				○			0							51
45	漆下遺跡	秋田県	北秋田市	3			○	○			4		○		○			52
46	桐内A遺跡	秋田県	北秋田市	0							2				○			53
47	二重島B遺跡	秋田県	北秋田市	0							1							54
48	向様田D遺跡	秋田県	北秋田市	0							1					○		55
49	ヲフキ遺跡	秋田県	にかほ市	1			○				1				○			56
50	宝ヶ峯遺跡	宮城県	石巻市	2		○	○				4				○			57
51	王ノ壇遺跡	宮城県	仙台市	0							1			○				58
52	富沢館跡	宮城県	仙台市	2		○					0							59
53	前田遺跡	宮城県	川崎町	1							0				○			60
54	小山崎遺跡	山形県	遊佐町	0							1			○				61
55	砂子田遺跡	山形県	天童市	0							1					○		62

表 3 異形土器出土遺跡一覧表 (2) (文献番号は末尾の異形土器出典に対応)

遺跡 番号	遺跡	都道府県	市区町村	異形台付土器							釣手／香炉形土器							文献
				個体数	1 期	2 期	3 期	4 期	5 期	6 期	個体数	1 期	2 期	3 期	4 期	5 期	6 期	
56	日向南遺跡	福島県	飯館村	2		○		○			1				○			63-65
57	松ヶ平 D 遺跡	福島県	飯館村	0							1			○				66
58	羽白 C 遺跡	福島県	飯館村	2				○			0							67
59	邸下遺跡	福島県	福島市								1							68
60	町 B 遺跡	福島県	郡山市	4		○	○				6		○	○	○			69
61	又兵衛田 A 遺跡	福島県	須賀川市	0							1							70
62	戈敷遺跡	福島県	須賀川市	0							1		○					71
63	元屋敷遺跡	新潟県	村上市	2			○	○			5				○	○		72/73
64	野地遺跡	新潟県	胎内市	1			○				0							74
65	二太子沢 C 遺跡	新潟県	新発田市	1		○					0							75
66	御井戸遺跡	新潟県	新潟市	0							2		○	○				76
67	三十稲葉遺跡	新潟県	長岡市	1		○					0							77
68	岩野原遺跡	新潟県	長岡市	0							1			○				78
69	籠峰遺跡	新潟県	上越市	0		○					3							79
70	川戸釜八幡遺跡	栃木県	日光市	0							9							80
71	萩ノ平遺跡	栃木県	那須烏山市	0							1							81
72	御霊前遺跡	栃木県	下野市	0							1							82
73	上り戸遺跡	栃木県	芳賀町	0							2		○	○				83
74	水神山遺跡	栃木県	鹿沼市	1							0				○			84
75	高畑遺跡	栃木県	茂木町	1				○			0							85
76	小倉水神社裏遺跡	栃木県	栃木市	0							1							86
77	後藤遺跡	栃木県	栃木市	1			○				0							87
78	伯仲遺跡	栃木県	栃木市	0							1							88
79	藤岡神社遺跡	栃木県	栃木市	13						○	○							89
80	寺野東遺跡	栃木県	小山市	4			○			○	1		○					90/91
81	出流原遺跡	栃木県	佐野市	1				○			0							92
82	矢瀬遺跡	群馬県	みなかみ町	2				○		○	0							93
83	馬場東矢次 II 遺跡	群馬県	前橋市	0							1		○					94
84	大道遺跡	群馬県	前橋市	2				○			3		○	○				95
85	下新井遺跡	群馬県	榛東村	1				○			0							96
86	若田原遺跡	群馬県	高崎市	1			○				0							97
87	天神原遺跡	群馬県	安中市	0							1							98
88	谷地遺跡	群馬県	藤岡市	2							22		○	○				99/100
89	中栗須滝川 II 遺跡	群馬県	藤岡市	3				○			0							101
90	東長岡井戸口遺跡	群馬県	太田市	1				○			0							102
91	小場遺跡	茨城県	高萩市	1		○					0							103
92	三美遺跡	茨城県	常陸大宮市	1			○				0							104
93	井上貝塚	茨城県	行方市	0							1			○				105
94	部田野宮前貝塚	茨城県	ひたちなか市	1						○	0							106/107
95	大貫落神遺跡	茨城県	大洗町	2			○				0							108
96	外塚遺跡	茨城県	筑西市	1				○			0							109
97	上境旭台貝塚	茨城県	つくば市	12			○	○	○	○	10		○	○	○			110-112
98	小山台貝塚	茨城県	つくば市	2						○	0							113
99	福田貝塚	茨城県	稲敷市	0							1			○				114
100	片岡遺跡	茨城県	鹿嶋市	1			○				0							115
101	釈迦才仏遺跡	茨城県	古河市	10			○	○	○	○	0							116
102	本田遺跡	茨城県	境町	3					○	○	0							117
103	石畑遺跡	茨城県	五霞町	1						○	0							118
104	冬木 A 貝塚	茨城県	五霞村	0							1	○						119
105	前田村遺跡	茨城県	つくばみらい市	9					○	○	5		○	○	○			120/121
106	上高津貝塚	茨城県	土浦市	1				○			0							122
107	中妻貝塚	茨城県	取手市	2			○	○			2							123/124
108	神明遺跡	茨城県	取手市	2						○	0							125/126
109	北方貝塚	茨城県	龍ヶ崎市の	5					○	○	7		○	○	○			127
110	立木貝塚	茨城県	利根町	0							2			○				128



表4 異形土器出土遺跡一覧表(3) (文献番号は末尾の異形土器出典に対応)

遺跡 番号	遺跡	都道府県	市区町村	異形台付土器							釣手／香炉形土器							文献
				個体数	1期	2期	3期	4期	5期	6期	個体数	1期	2期	3期	4期	5期	6期	
111	東金野井貝塚	千葉県	野田市	1				○			0							129
112	野田貝塚	千葉県	野田市	1						○	3			○	○			130
113	山崎貝塚	千葉県	野田市	1			○				0							131
114	中野久木谷頭遺跡	千葉県	流山市	0							1		○					132
115	三輪野山貝塚	千葉県	流山市	11		○	○	○	○	○	6		○	○	○			133/134
116	下ヶ戸貝塚	千葉県	我孫子市	64				○	○	○	24		○	○	○			135/136
117	上根郷遺跡	千葉県	柏市	0							1							137
118	貝の花貝塚	千葉県	松戸市	5			○	○	○		2		○	○				138
119	下水遺跡	千葉県	松戸市	1			○				3		○	○				139
120	寺向遺跡	千葉県	白井市	0							1			○				140
121	中沢貝塚	千葉県	鎌ヶ谷市	4			○		○	○	1		○	○				141/142
122	道免き谷津遺跡	千葉県	市川市	1				○			2		○	○				143/144
123	堀之内貝塚	千葉県	市川市	2		○	○				2		○	○				145
124	曾谷貝塚	千葉県	市川市	2				○			1							146/147
125	古作貝塚	千葉県	船橋市	0							1		○					148
126	藤崎堀込貝塚	千葉県	習志野市	1				○			0							149
127	本郷台遺跡	千葉県	八千代市	0							1							150
128	芝山遺跡	千葉県	八千代市	0							1		○					151
129	向境遺跡	千葉県	八千代市	0							1		○					152
130	天神台遺跡	千葉県	印西市	2			○			○	0							153/154
131	馬場遺跡	千葉県	印西市	8			○	○	○	○	8		○	○	○			155
132	宮内井戸作遺跡	千葉県	佐倉市	27		○	○	○	○	○	53		○	○	○			156/157
133	江原台遺跡	千葉県	佐倉市	1		○					0							158
134	井野長割遺跡	千葉県	佐倉市	19		○	○	○		○	7		○	○	○			159-161
135	遠部台遺跡	千葉県	佐倉市	1			○				0							162
136	飯合作遺跡	千葉県	佐倉市	1			○				0							163
137	吉見台遺跡	千葉県	佐倉市	45		○	○	○	○	○	20		○	○	○			164/165
138	御山遺跡	千葉県	四街道市	1				○			0							166
139	千代田遺跡	千葉県	四街道市	5			○	○		○	2				○			167
140	嶋越遺跡	千葉県	四街道市	14			○	○		○	13		○	○	○			168
141	内野第1遺跡	千葉県	千葉市	45		○	○	○	○	○	12		○	○	○			169
142	加曽利貝塚	千葉県	千葉市	3			○	○			0							170
143	芳賀輪遺跡	千葉県	千葉市	1				○			0							171
144	多部田貝塚	千葉県	千葉市	1					○		3			○	○			172
145	六通貝塚	千葉県	千葉市	5			○	○	○		6		○	○	○			173/174
146	菊間手永遺跡	千葉県	市原市	0							1							175
147	祇園原貝塚	千葉県	市原市	20		○	○	○	○	○	71		○	○	○	○		176
148	能満上小貝塚	千葉県	市原市	0							27		○	○				177
149	西広貝塚	千葉県	市原市	10			○	○			44		○	○	○			178/179
150	石神台遺跡	千葉県	市原市	4				○	○		1							180
151	野毛平上之内遺跡	千葉県	成田市	0							1							181
152	土屋殿台貝塚	千葉県	成田市	1				○			0							182
153	小菅法華塚Ⅱ遺跡	千葉県	成田市	4		○	○				3		○	○				183
154	墨古沢遺跡	千葉県	酒々井町	1							12		○	○	○			184
155	上貝来土遺跡	千葉県	芝山町	0							1				○			185
156	高谷川遺跡	千葉県	芝山町	0							1		○					186
157	居合台遺跡	千葉県	大網白里市	1						○	0							187
158	良文貝塚	千葉県	香取市	0							1		○					188
159	余山貝塚	千葉県	銚子市	3			○	○	○		1		○					189
160	八祖遺跡	千葉県	銚子市	0							1		○	○				190
161	中台貝塚	千葉県	横芝光町	1			○				0							191
162	下太田貝塚	千葉県	茂原市	5						○	2		○	○				192
163	上宮田台遺跡	千葉県	袖ヶ浦市	32		○	○	○	○	○	11			○	○			193
164	三直貝塚	千葉県	君津市	26		○	○	○	○	○	15		○	○	○			194
165	鹿島台遺跡	千葉県	君津市	5		○	○	○			11		○	○	○			195/196

表 5 異形土器出土遺跡一覧表 (4) (文献番号は末尾の異形土器出典に対応)

遺跡 番号	遺跡	都道府県	市区町村	異形台付土器							釣手／香炉形土器							文献
				個体数	1期	2期	3期	4期	5期	6期	個体数	1期	2期	3期	4期	5期	6期	
166	豊田遺跡	千葉県	君津市	1			○				0							197
167	原ヶ谷戸遺跡	埼玉県	深谷市	3				○		○	0							198
168	上敷免北遺跡	埼玉県	深谷市	1				○			0							199
169	諏訪木遺跡	埼玉県	熊谷市	5				○			1			○				200/201
170	長竹遺跡	埼玉県	加須市	11			○	○		○	5		○	○	○			202-204
171	赤城遺跡	埼玉県	鴻巣市	0							8		○	○	○			205
172	中三谷遺跡	埼玉県	鴻巣市	1				○			0							206
173	御陣山遺跡	埼玉県	久喜市	2						○	0							207
174	小林八束 1 遺跡	埼玉県	久喜市	3						○	3			○	○			208
175	下栢間遺跡	埼玉県	久喜市	1				○			1		○					209
176	皿沼遺跡	埼玉県	白岡町	0							1							210
177	後谷遺跡	埼玉県	桶川市	7				○	○		9		○	○	○			211
178	高井東遺跡	埼玉県	桶川市	5		○	○	○			2		○					212
179	雅楽谷遺跡	埼玉県	蓮田市	2					○	○	3		○	○				213/214
180	帆立山遺跡	埼玉県	蓮田市	1				○			0							215
181	雷電池東遺跡	埼玉県	鶴ヶ島市	0							1							216
182	鶴ヶ島中学西遺跡	埼玉県	鶴ヶ島市	0							1		○					217
183	加能里遺跡	埼玉県	飯能市	2			○			○	0							218
184	小深作遺跡	埼玉県	さいたま市	7		○		○	○	○	1		○					219
185	真福寺貝塚	埼玉県	さいたま市	2						○	0							220
186	黒谷貝塚前遺跡	埼玉県	さいたま市	0							1							221
187	寿能遺跡	埼玉県	さいたま市	1				○			0							222
188	馬場小室山遺跡	埼玉県	さいたま市	2							1		○					223
189	南方遺跡	埼玉県	さいたま市	2							2		○	○				224
190	石神貝塚	埼玉県	川口市	3			○	○		○	2							225
191	清左衛門遺跡	埼玉県	白岡市	1					○		0							226
192	西ヶ原貝塚	東京都	北区	2				○			0							227
193	大森貝塚	東京都	品川区・大田区	1				○			2		○					228
194	下沼部遺跡	東京都	大田区	1						○	0							229
195	下宅部遺跡	東京都	東村山市	7		○	○	○			0							230
196	吉祥山遺跡	東京都	武蔵村山市	2				○			0							231
197	平尾 No.9 遺跡	東京都	稲城市	3		○		○			2		○	○				232
198	広袴遺跡	東京都	町田市	2		○					0							233
199	なすな原遺跡	東京都	町田市	3			○		○		0							234
200	田端東遺跡	東京都	町田市	0							1							235
201	華蔵台遺跡	神奈川県	横浜市	9		○	○			○	2							236
202	池端・金山遺跡	神奈川県	伊勢原市	2			○	○			0							237/238
203	王子ノ台遺跡	神奈川県	平塚市	1		○					0							239
204	太岳院遺跡	神奈川県	秦野市	0							1		○					240
205	平沢同明遺跡	神奈川県	秦野市	1				○			1							241
206	上ノ原遺跡	山梨県	北杜市	0							1							242
207	姥神遺跡	山梨県	北杜市	1				○			1			○				243
208	エリ穴遺跡	長野県	松本市	10		○	○	○	○	○	44		○	○	○	○	○	244-247
209	離山遺跡	長野県	安曇野市	1			○				1		○					248
210	中越遺跡	長野県	宮田村	2				○			0							249
211	大明神遺跡	長野県	大桑村	1				○			0							250
212	中村中平遺跡	長野県	飯田市	0							8		○					251

ことは難しく、ある時期に位置づけられる可能性が高い資料が少なくとも1点ある場合に○印を付している。時期を判別できる資料が1点もない場合には全時期空欄としている。

### 3-3. 分析の方法

集成した資料について以下の分析を実施する。

#### ①編年上の位置づけ

本稿で対象とする各種異形土器には同時期・地域の一般的な精製土器と同様な文様が施文される場合が多い。したがって、文様の型式学的特徴から編年上の位置を推定することが一定程度可能である。

型式学的特徴および竪穴住居跡等の遺構における共伴関係から、各資料の編年上の位置づけを検討する。

#### ②時空間的分布の検討

編年上の位置づけに基づいて時期ごとの分布図を作成し、各器種の消長や展開の実態を把握する。また、土器型式圏の変化との比較を通じて、異形土器の出現・展開と型式間交渉との関係を検討する。

## 4. 分析

### 4-1. 編年上の位置づけ

#### 4-1-1. 異形台付土器

##### ①北海道

北海道の異形台付土器は8例を集成した(図3)。

図3-1・2は忍路土場遺跡C区IIIc層で出土しており、同時期ないし近接した時期の所産と考えられる。図3-7は忍路土場遺跡C区IIIa層の出土であり、層位的に同図1・2よりも上位である(種市ほか編1989)。筆者は同遺跡IIIc層を2b期、IIIa層を3期の基準と位置づけており(西村 印刷中)、同図1・2と同図7との間には時間差が想定される。同図7には口唇上および注口状突出部縁辺の突起、複列化した刻目列、羽状縄文などの特徴が認められる。これらは道央における3期の土器群の特徴である。同図1・2を2b期、同図7を3期と位置づけてよいだろう。これらを基準にすると、同図3・4・6は2b期の所産と考えられる。

同図5は野田生1遺跡AH14竪穴住居跡覆土で出土している(種市ほか編2003)。AH14出土土器は4a期を主体としており、同図5も4a期に位置づけられる可能性が高い。

同図8は末広遺跡IIH-52竪穴床面で出土である(大谷・田村編1982)。筆者はIIH-52竪穴出土土器を4a期の基準としており(西村 印刷中)、同図8も4a期と考えられる。

同図5と8は上面観が方形を基調とする点で共通

しており、北海道における4a期異形台付土器の特徴と考えられる。ただし、忍路土場IIIc層では方形基調の釣手／香炉形土器が出土しており(図6-1)、異形台付土器と釣手／香炉形土器が相互に関連するのであれば一概に新相の特徴ともいえない。

##### ②東北

東北では47例を集成し、遺存状況の良好な31点を図示した(図4)。なお、図示していないが新潟県域のうち阿賀野川以北は東北に、以南を関東・中部に含めて計数している。

主たる文様要素によって、磨消縄文グループ(図4-1～18・23)、刻目隆帯グループ(同図19～22)、多重沈線グループ(同図24～31)に分類することができる。

集成した資料のうち、確実に1期に遡る例はない。異形台付土器に認められる磨消縄文では曲線的かつおおぶりのモチーフが多用されている。これは2～3期の一般的な特徴であり、1期の磨消縄文では区画線が鋭角的で複雑に入り組むモチーフを多用する(西村2018)。異形台付土器の出現は2期以降と考えてよいだろう。

同図3は体下部に横帯文を施文している。筆者は横帯文の消失を東北における2／3期の境界としているので(西村2018)、同図3は2期に位置づけられる可能性が高い。磨消縄文グループの少なくとも一部は2期の所産と考えられる。

同図24は青森県水木沢遺跡3号竪穴住居床面で出土し(古市ほか編1977)、共伴する土器から4期の所産とみられる。同図27は岩手県吉田館跡SI52出土であり(千葉編2008)、共伴する土器から4期の所産とみられる。以上の例から、多重沈線文グループが4期の例を含むことは確実である。

刻目隆帯グループのうち同図20は宮城県富沢館跡SI9で出土しており(工藤ほか編2018)、同住居跡出土土器は2～3期に位置づけられる。関東における先行研究では同様の刻目隆帯を有する一群(図5-1～5など)を加曽利B2式に位置づけている(内田1984; 蜂屋2013a)。出土例の少ない現時点では2期に位置づけておくのが最も蓋然性が高いだろう。ただし、前項で4a期に位置づけた図3-8のような例もあり、時間幅のある一群である可能性もある。

型式学的特徴や共伴関係から確実に5期以降に下る資料は認められない。

以上のことから、東北の異形台付土器は2期に出現し4期が下限と考えられる。2期には磨消縄文グループおよび刻目隆帯グループ、3期は磨消縄文グループ、4期は多重沈線グループを主体とする。磨消縄文



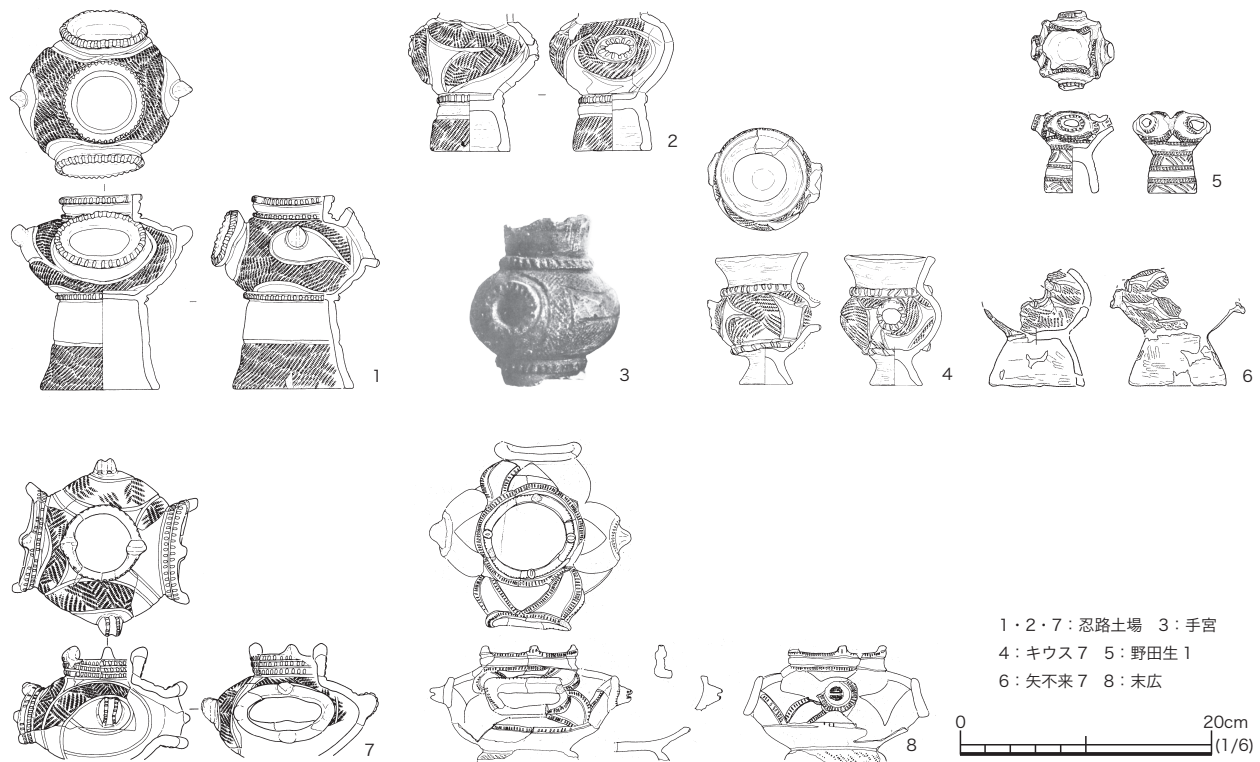


図3 北海道の異形台付土器

グループの位置づけは遺構や同一層序における共伴資料、遺跡全体の出土傾向などから判断した。磨消縄文グループの一部は4期にも残存するが(図4-11・23)、ごくわずかであり4期の主体は多重沈線文グループである。

また、東北部では関東系の文様を有する資料も散見される(同図17・18)。

### ③関東・中部

関東・中部では586例を集成し、遺存状況の良好な25点を図示した(図5)

関東・中部における編年上の位置づけは先行研究を参考にした(内田1984; 中村2013a; 蜂屋2008, 2013a)。形態、文様の変遷を追うことができる。

出現は2期で、器形は体部そろばん玉形の台付壺形を呈する(図5-1~6・9)。口縁部、台部は外反するものもある(同図2~5)。文様は刻目隆帯(同図1~6)のほか羽状沈線(同図2・4・6・9)が多用される。

3期には口縁部、台部が直線的に立ち上がる例が増え、注口状突出部が発達する(同図7・8・10・11)。注口状突出部と直交する線上で体部が上湾して膨らむ例や(同図8・10)、突起が付される例もある(同図11)。磨消弧線文が多用され、注口状突出部や突起の先端に竹管状工具による刺突が充填される(同図8・10・11)。

同図12は眼鏡状の磨消弧線文を有する3~4期の

例で、東南部にも類例がある(図4-17)。

4期には体部が扁平化し、口縁部および台部が大きく外傾する(図5-13~17)。注口状突出部は遠位端の径が大きくなり、ラッパ状を呈する(同図14・15・17)。しばしば口唇上に突起が付される(同図13~16)。口唇上の突起は北海道・東北では2~3期にもみられ(図3-7、図4-3・21)文様は磨消弧線文のほか(図5-13・15・16)、多重沈線も多用される(同図14)。無文の例もある(同図17)。体部の要所には突起が付される(同図14~16)。瘤状貼付を付す場合もある(同図14)。

5期には口縁部と体部が一体化し、台付鉢形の器形に変化する(同図18・19)。文様は隆起帯縄文(同図19)のほか隆帯上に刻目列をめぐる例もある(同図18)。随所に円形の透かしが施される(同図18・19)。

6期の器形は5期同様の台付鉢形である。5期以前は水平ないし仰角であった注口状突出部は俯角気味に突出する(同図20~23)。刻目の入った口唇上突起、瘤状貼付、刻目隆帯、などが多用される。透かしは円形に加えて、長楕円形や三日月形が認められる(同図21・22)。注口状突出部の外面や体下半部、台上半部には沈線が充填される。

同図24・25は6~7期の過渡期的な資料である。晩期初頭の異形台付土器の特徴として、注口状突出部の形骸化、台部の有孔化などが指摘されている(蜂屋2008)。同図24は台部が有孔化しているが注口状突



図4 東北の異形台付土器

出部が残存している。同図 25 は注口状突出部が形骸化し、鰭状突起に置き換わっている。

#### 4-1-2. 釣手／香炉形土器

##### ①北海道

北海道では 26 例を集成したが、大半がキウス 4 遺跡で出土している。15 点を図示した(図 6)。

図 6-1 は上面観方形で 4 単位の有孔突起が付され、体下部に横帯文が施文される。同資料は忍路土場遺跡 C 地区 IIIc 層で出土している(種市ほか編 1989)。図 3-1・2 の異形台付土器と同一層での出土であり、2b 期の所産とみてよいだろう。図 6-6 ~ 8 は同図 1 と同一層で出土しており、有孔突起の破片とみられる。やはり 2b 期のものだろう。

同図 2 ~ 5・10 ~ 15 はキウス 4 遺跡で出土している。R 地区盛土(佐川ほか編 2003)や包含層(高橋ほか編 2001)を中心に出土している。文様や同一層での出土土器からみて、4 ~ 5 期の範疇でとらえられる。同図 3・4 は該期によくみられる壺や注口土器と器形が共通し、一般的な土器に釣手部が付されているものと考えられる。注口土器に釣手が付される例は美々 4 遺跡でも出土しており(同図 9)、道央の周堤墓遺跡に限定される。

以上のように、北海道では 2・4・5 期の釣手／香炉形土器が認められる。確実に 3 期に位置づけられる資料はなく、系統的な変遷があるものかどうかは現時点では判断できない。全容が把握できる資料では壺や注口土器との共通性が認められ、本州島の釣



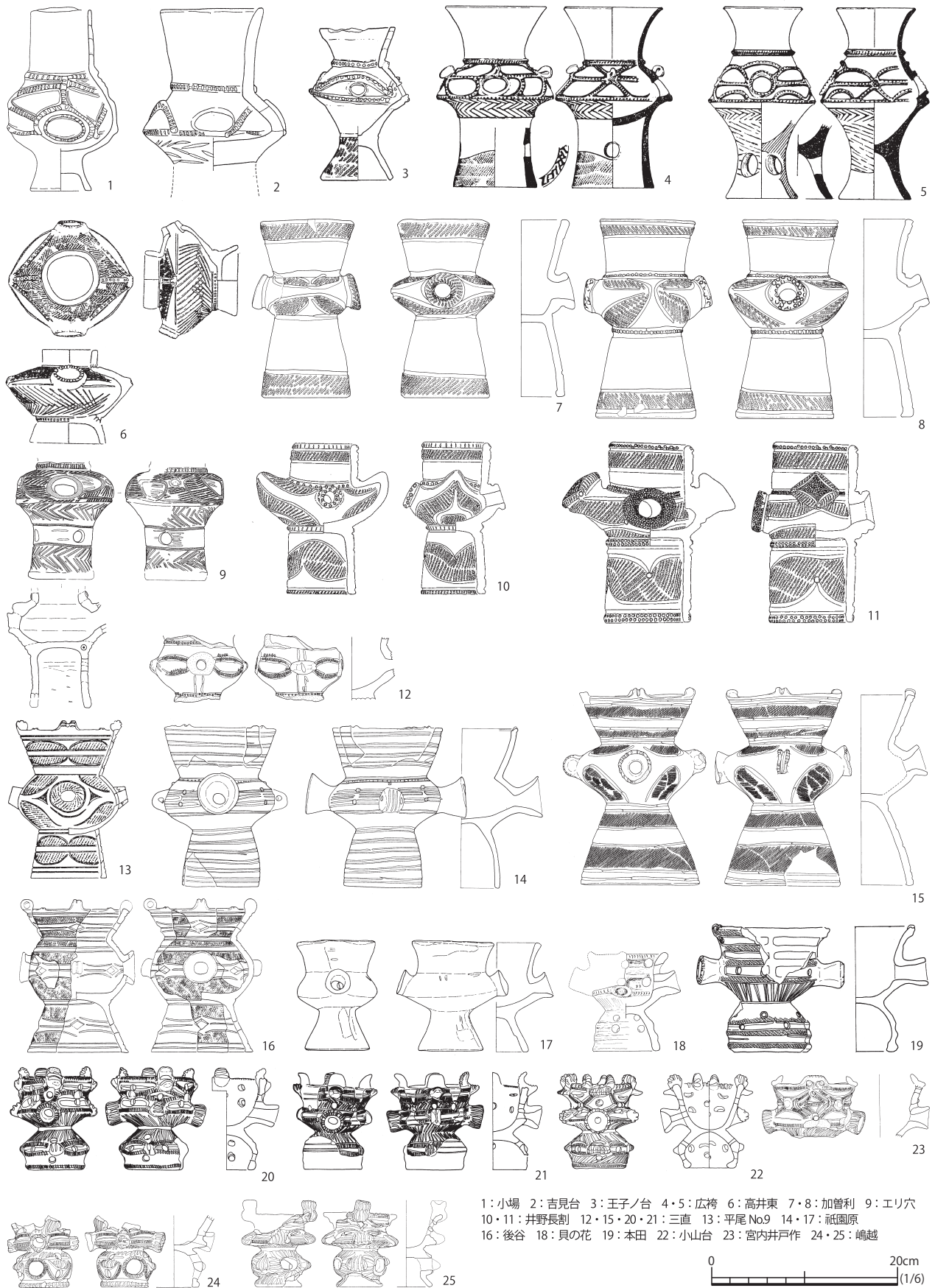


図5 関東・中部の異形台付土器



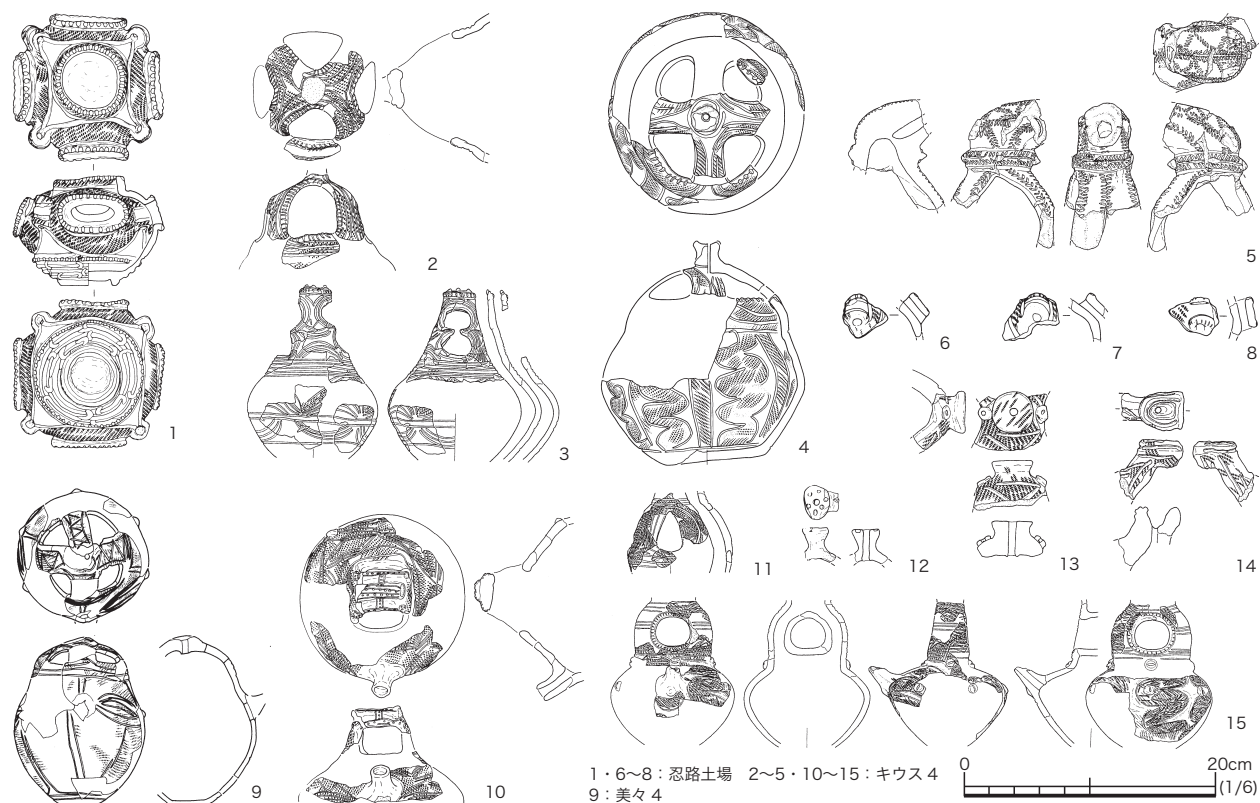


図6 北海道の釣手／香炉形土器

手／香炉形土器とは異なる成立過程を有する可能性がある。

## ②東北

133点を集成し、遺存状況の良好な25点を図示した(図7)。

図7-1～7は4単位の有孔突起を有する一群である。同図1は青森県酒美平遺跡SI26床面で出土し(大野ほか編2000)、横帯文が施文されることと共伴する土器から判断すると2期の所産である。同様に横帯文を有する同図2・7は2期の所産と判断できる。同図1・2は図6-1の忍路土場例と酷似している。

図7-3・4は上面観方形基調の器形が同図1・2と共通する。異形台付土器の刻目隆帯グループとも同時期ないし近接した時期であると考えられるため、2期に位置づけておく。

同図5は木葉状の磨消縄文や地文に羽状縄文を採用していることから相対的に新しいと考えられ、3期に位置づけられる。

同図6は福島県松ヶ平D遺跡1号住居跡で出土している(小平ほか編1984)。共伴する土器から3期に位置づけられる。

同図5・6から、4単位の有孔突起を有するもの、上面観方形基調の一群は3期にも残存するものと考えられる。

同図9・11・14は多重沈線が施文される一群で、

異形台付土器の多重沈線グループと同時期であろう。したがって4期に位置づけられる。

同図10・13・16は後述する関東・中部の出土例との共通性が強い一群である。福島県中通り地域には関東系の釣手／香炉形土器が直接的に広がっていた可能性がある。

同図12・15・17～20は瘤状貼付を多用する一群である。瘤状貼付の多様は瘤付土器第Ⅱ段階の特徴であり、これらは5期に位置づけられる。

同図21～23は刻目や刺突を多用する一群である。刻目や刺突の多用は瘤付土器第Ⅲ段階の特徴であり、6a期に位置づけられる。

同図24は岩手県水神遺跡IIc58土坑で出土している(高橋ほか1986)。同土坑出土として報告されている土器片から判断する限り、瘤付土器Ⅲ～Ⅳ段階の所産と考えられ、6期に位置づけることができる。同図24は先行研究で瘤付土器第Ⅳ段階に位置づけられているが(平原2013b)、同遺跡IIg60住居跡出土土器と対比すると、瘤付土器第Ⅲ段階に相当する6a期に位置づけるのが妥当であろう。

同図25は川原平(1)遺跡土器集中域ブロック12で出土している(岡本ほか編2016)。同一ブロック出土土器は瘤付土器第Ⅳ段階を主体としており、同図25も6b期のものと考えられる。同図25は三叉状の透かしが認められ、晩期の香炉形土器により接近した例と考えられる。

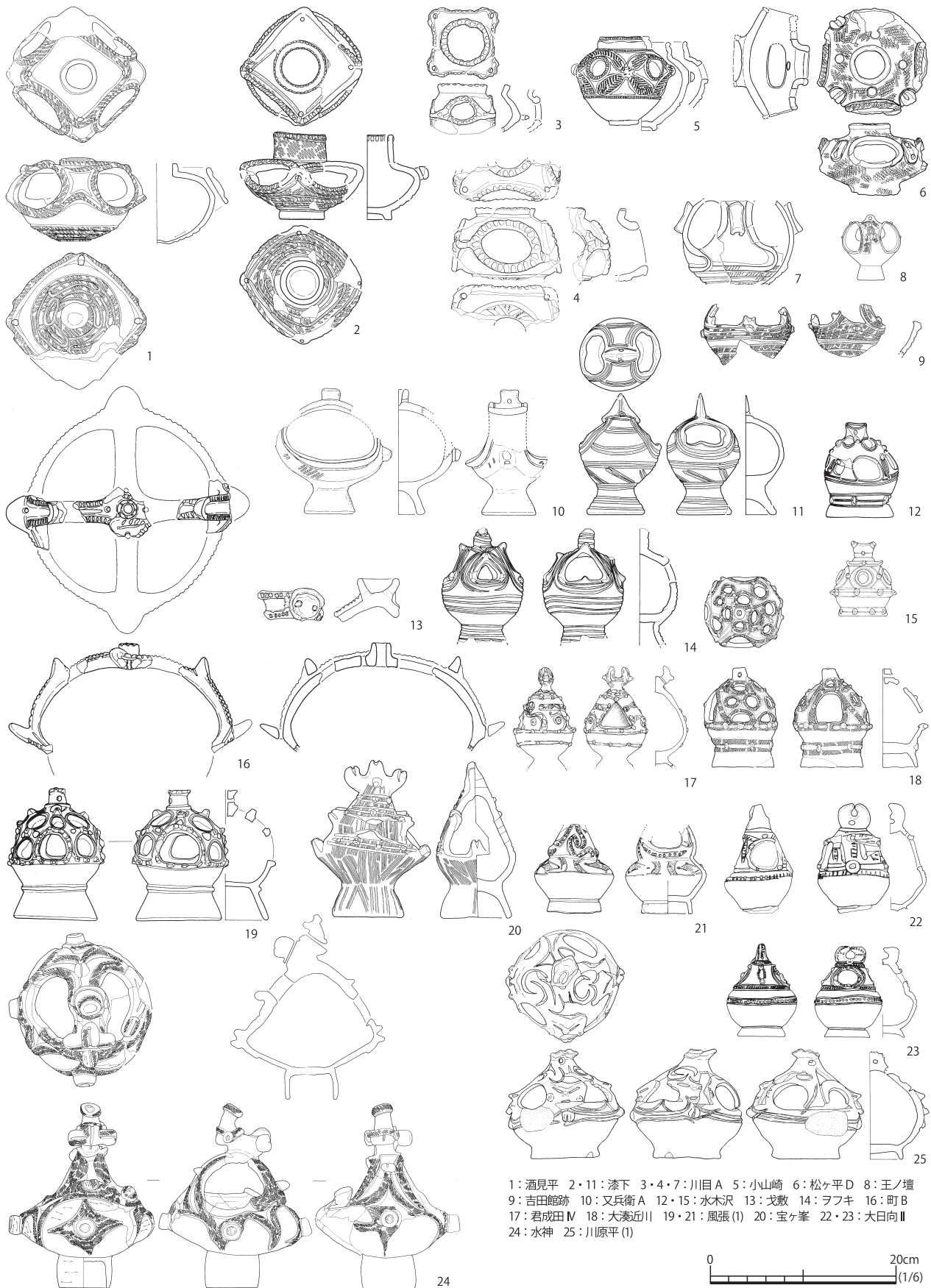


図 7 東北の釣手／香炉形土器

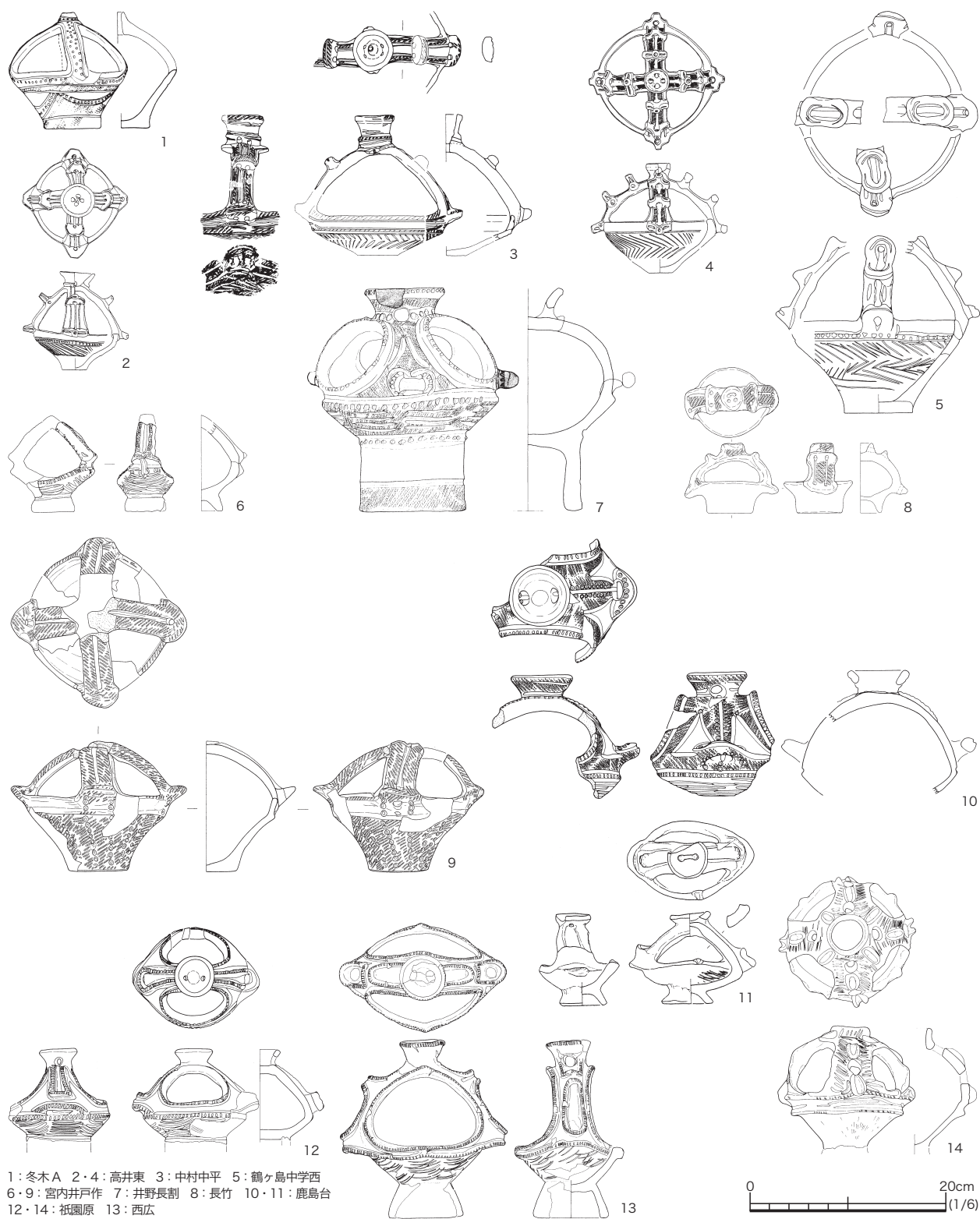


図8 関東・中部の釣手／香炉形土器



### ③関東・中部

関東・中部では 563 点を集成し、14 点を図示した(図 8)。

図 8-1 は茨城県冬木 A 貝塚 SI10 で出土している(高村・根本編 1981)。蜂屋は本例を共伴遺物から加曽利 B1 式期に位置づけている(蜂屋 2004)。確かに同住居跡では堀之内 2 式～加曽利 B1 式とみられる土器片が出土しているが、加曽利 B2 式古段階とみられる波状口縁深鉢破片も出土しており、遺物はほとんどが覆土出土とされている(高村・根本編 1981)。同図 1 が加曽利 B1 式に遡ることを積極的に主張することは難しい。

堀之内式から加曽利 B1 式にかけて釣手／香炉形土器の出土例が散見されるという指摘もあるが(蜂屋 2004)、管見の限りでは確実に 1 期以前に位置づけられる資料は認められない。後に蜂屋は「加曽利 B2 式に出現するとみられ、最新資料を加えても出現時期がさらに遡ることができる明らかな事例はない」と述べているように(蜂屋 2013b)、出現時期は 2 期と判断してよいだろう。

図 8-2 ～ 5 は体部の羽状沈線文あるいは斜線文によって特徴づけられる一群である。同図 2・4 は、埼玉県高井東遺跡のそれぞれ 14 号住居跡、23 号住居跡で出土している(市川ほか編 1974)。共伴する土器から 2 期に位置づけられる。関東西部および中部においては羽状沈線文の一群を 2 期に位置づけることができるだろう。関東東部では加曽利 B2 ～ B3 式期には縄文施文例が多く、曾谷式以降には刻目・沈線が多用されることが指摘されている(蜂屋 2013b)。蜂屋の指摘に従えば、同図 7 ～ 10 は 2 ～ 3 期に位置づけられる。

一方で、刻目・沈線施文の同図 12 は千葉県祇園原貝塚 50 号住居跡で出土している(忍澤編 1999)。同住居跡出土土器は関東東部における加曽利 B3 式土器の基準とされる資料であり(菅谷 1996)、同図 12 も基本的には 3 期の所産と考えられる。したがって、刻目・沈線主体の施文をもって曾谷式以降と断定することは難しい。ここでは刻目・沈線を主体に施文される図 8-6・12・13 のような資料を 3 ～ 4 期に位置づける。

同図 11 は千葉県鹿島台遺跡 DSI-018 で出土しており、無文である(栗田ほか編 2006)。共伴する土器から 3 期に帰属するものと考えられる。同図 11 の形態は同図 8・10・12・13 など、縄文施文の一群、刻目・沈線施文の一群のいずれにも類似する例が認められる。したがって、少なくとも 3 期には両者が共存していた可能性が高い。

以上のことから、関東東部において大局的には縄文

施文から刻目・沈線施文への変遷が想定される。しかし、両者は時間軸上で明瞭に区分されるものではなく、3 期ごろに併存しつつ次第に置き換わっていったものと考えられる。

同図 14 は祇園原貝塚 41 号住居跡で出土している(忍澤編 1999)。共伴遺物から 5 期の所産と考えられる。釣手に認められる瘤状貼付は安行 1 式土器にみられる一般的な特徴を有しており型式学的にも矛盾しない。確実に 5 期と判断できる資料は他にない。5 期以降の釣手／香炉形土器は極めて限定的な存在である。関東・中部の釣手／香炉形土器は基本的に 4 期までで消失すると考えていいだろう。

なお長野県エリ穴遺跡では東北系とみられる 5 ～ 6 期の釣手／香炉形土器破片が報告されている。

## 4-2. 時空間的分布の検討

### 4-2-1. 異形台付土器の時空間的分布

図示した資料の編年的位置づけを基準として集成した各個体の帰属時期を決定し、2 ～ 6 期の時期別分布図を作成した(図 9)。なお、型式学的特徴や共伴遺物による帰属時期決定が困難な個体もあり、集成した全資料の分布を示しているわけではない。

2 期は異形台付土器の出現期に当たるが、道央から中部高地まで非常に広範囲に分布が認められる<sup>4)</sup>。下総台地・東京湾東岸あたりが分布の中心とみられる。東北日本海側には分布しない。

3 期の分布範囲は 2 期とほぼ変わらない。東北日本海側でも散発的に分布が認められるようになる。分布の中心は 2 期同様に下総台地周辺だが、より分布密度が高まる。

4 期の分布範囲は 3 期から大きな変化はない。東北では北部に偏在する。分布の中心は下総台地だが、利根川沿いに大宮台地まで高密度の分布が認められるようになる。

5 期には分布範囲が縮小し、東北以北での分布は認められない。分布の中心は下総台地・東京湾東岸である。

6 期の分布範囲は 5 期と同様である。分布の中心はやはり下総台地・東京湾東岸だが、大宮台地でも分布密度が高まる。

以上から、異形台付土器の時空間的分布について以下の 3 点を指摘することができる。

- 1: 日本列島東北部の広範囲でほぼ同時に出現する。
- 2: 分布の中心は出現から後期末まで一貫して下総台地・東京湾東岸にある。
- 3: 5 期以降は分布範囲が縮小し、主体的な分布範囲は関東東部に限定される。

#### 4-2-2. 釣手／香炉形土器の時空間的分布

異形台付土器と同様に、2～6期の時期別分布図を作成した（図10）。なお、型式学的特徴や共伴遺物による帰属時期決定が困難な個体もあり、集成した全資料の分布を示しているわけではない。

2期は釣手／香炉形土器の出現期に当たるが、道央から中部高地まで非常に広範囲に分布が認められる。下総台地・東京湾東岸あたりが分布の中心とみられる。

3期の分布範囲は2期よりも縮小し、東北北部および北海道では認められなくなる。北限は北上川上流域である。分布の中心は2期同様に下総台地周辺である。

4期には東北全域および道央に出土例が認められ、分布範囲が再び北方に拡大する。下総台地・東京湾東岸では引き続き高密度に分布し、分布の中心をなす。一方で関東西部および中部高地ではほとんど分布が認められなくなる。

5期には分布範囲が縮小し、阿武隈山地以南ではほとんど認められなくなる。東北北部に偏在し、分布の中心をなす。北海道では道央でわずかに残る。

6期には東北北部への偏在性がさらに強まり、北上川流域以南での出土は全く認められなくなる。例外的にエリ穴遺跡では6期とみられる破片資料が出土している。北海道では消失する。

以上から、釣手／香炉形土器の時空間的分布について以下の5点を指摘することができる。

- 1：日本列島東北部の広範囲でほぼ同時に出現する。
- 2：2～4期は下総台地・東京湾東岸、5～6期は東北北部が分布の中心となる。
- 3：2～3期の東北北部では分布が疎らである。
- 4：阿武隈山地以南では5期以降ほとんど認められない。
- 5：北海道では後期を通じて散在的。

### 5. 考察

#### 5-1. 異形土器の出現・展開

異形台付土器および釣手／香炉形土器について編年上の位置づけと時空間的分布を検討してきた。ここでは分析結果を踏まえて、両器種の出現・展開について考察する。

両器種の出現はほぼ同時であり、かつ出現段階で列島東北部の広範囲に分布が認められる。また、両器種とも下総台地・東京湾東岸を分布の中心とする。したがって、ほぼ同時に下総台地・東京湾東岸あたりで出現し、ほぼ同じ範囲に展開したものと考えられる。

異形台付土器については2期に広域展開したものが4期まで各地域で系統的な変遷をたどるものと考えられる。

一方で、出現期～3期の北海道・東北においては相対的に釣手／香炉形土器が少ない。特に北海道と東北北部では3期に一度釣手／香炉形土器がほとんどみられなくなる。4期以降に東北北部を主体的な分布範囲とする釣手／香炉形土器は2期に広域展開したものが系統の変遷を経て成立しているのだろうか。あるいは4期に再び関東東部からの影響を受けて成立したものなのだろうか。

蜂屋（2004）では後期中葉に位置づけられる東北・北海道の釣手／香炉形土器が知られていなかったこともあり、4期以降に分布域が北方に拡大して東北全域に及んだものと説明されている。平原は2期に位置づけられる上面観方形が方形を呈し4単位の有孔突起を付す一群について（図7-1～4・6）、蜂屋（2004）が想定した関東の釣手／香炉形土器が4期に東北へ展開するという変遷には位置づけられないことを指摘している。平原によれば上面観方形で4単位の有孔突起を付す一群は次第に東北南部に分布を移し、5期まで残存すると説明している（平原2013b）。平原は上面観方形・4単位有孔突起の一群を別系統とみなしている。

しかし、本稿では筆者の編年案に基づく分析によって、上面観方形・4単位有孔突起の一群が釣手／香炉形土器出現段階で成立しており、道央まで広域的に展開していることが明らかになった。これは異形台付土器の出現・展開と軌を一にしており、両器種間に密接な関係があることは明らかである。異形台付土器と同様に、2期に広域展開し各地域で系統的に変遷する可能性は否定できない。

確かに、3期に東北北部で一度は釣手／香炉形土器が認められなくなるという事実は、東北内部における系統の変遷の説明を困難にしている。しかし、筆者は2期以降の東北では土器様相が斉一化し、単一の土器型式圏として把握できることを指摘している（西村2018）。3期の釣手／香炉形土器は東北南部では認められ（図10）、少なくとも土器型式圏内では釣手／香炉形土器が維持されている。したがって、東北内部での系統の変遷によって4期以降の釣手／香炉形土器が成立している可能性は否定できない。

いずれにせよ、問題を解消するためには個別資料の詳細な型式学的検討を要するため、ここでは釣手／香炉形土器の東北への展開は4期ではなく2期に生じた現象であった可能性を指摘するととどめる。

また、北海道で4～5期に認められる資料は壺や注口土器に釣手部を付したものとみられ、本州島の釣手／香炉形土器とは異なる経緯で成立している可能性がある。壺や注口土器との比較を通じて検証すべき問題であり、今後の課題である。

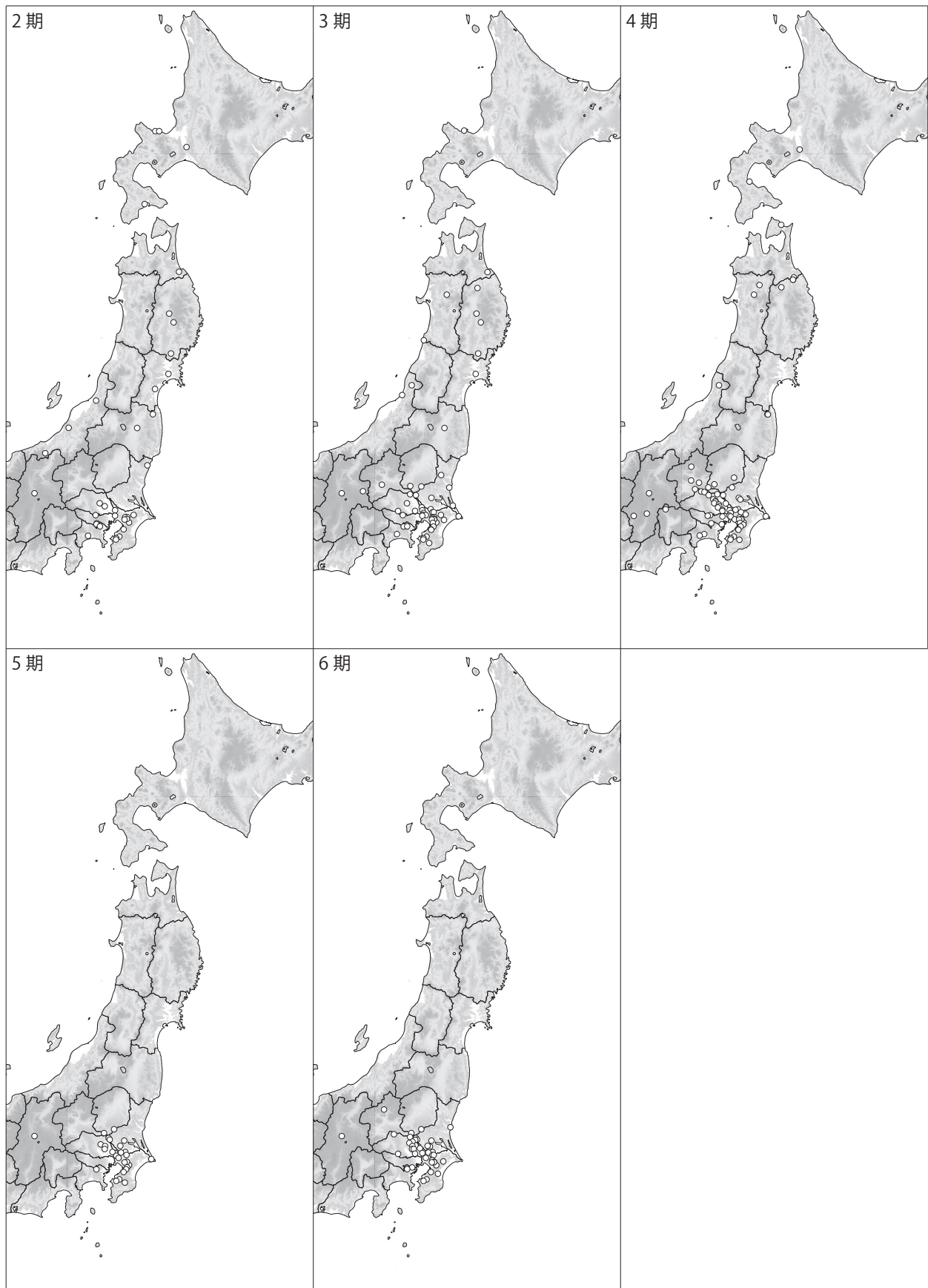


図9 異形台付土器の時期別分布状況



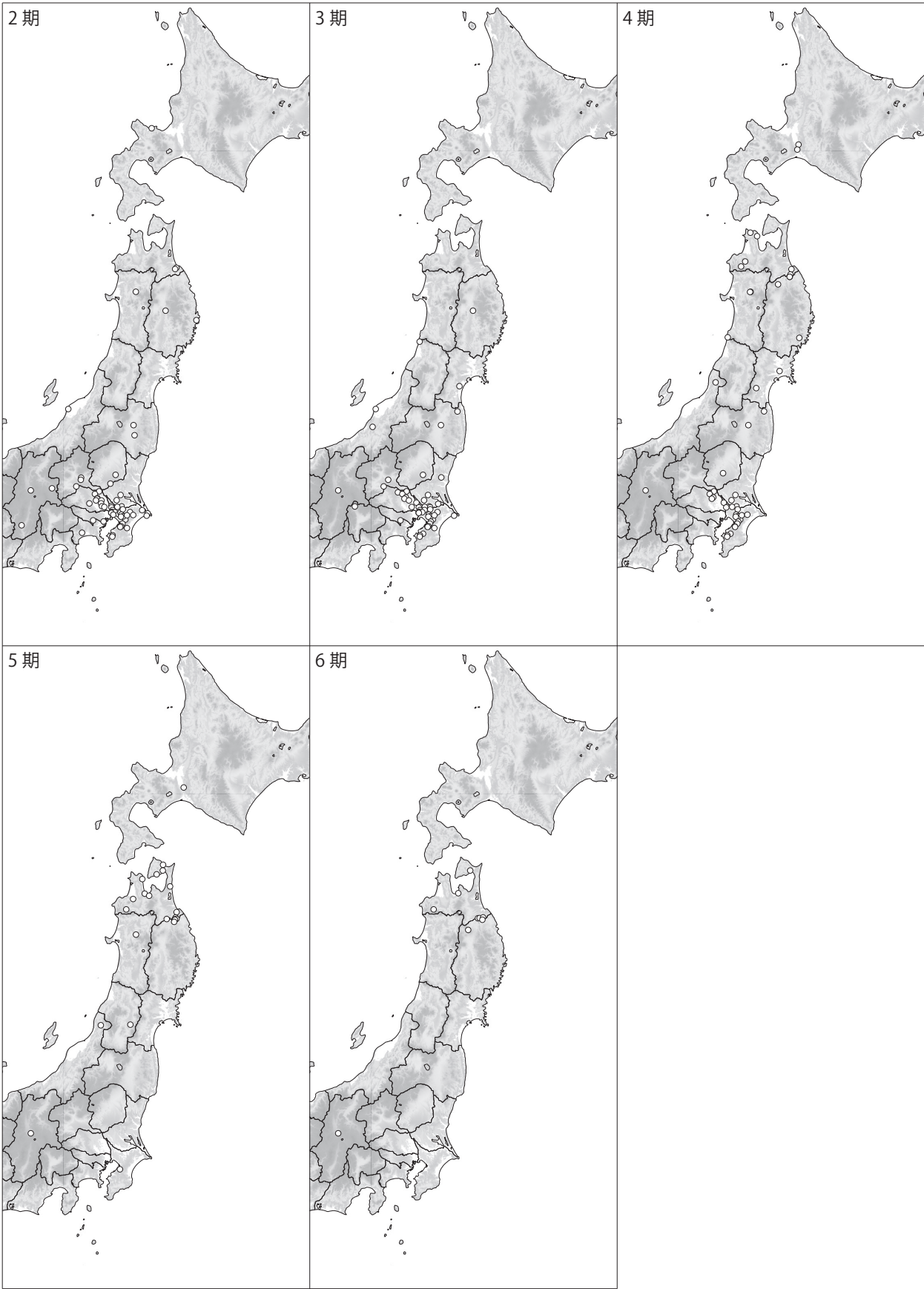


図 10 釣手／香炉形土器の時期別分布状況



## 5-2. 異形土器の消失

5 期以降、北海道・東北では異形台付土器が消失する。対照的に、関東では釣手／香炉形土器が激減し、6 期には消失する。

先行する 2～4 期には両器種が分布の疎密はあるものの広域的に併存する状況が認められる。成立・展開の過程に共通性が認められることから、両器種に類似した機能あるいは意味が付与されていた可能性を想定することができる。また、そのような機能あるいは意味に対して広域的に需要があったものと考えられる。

5 期以降に各地域で一方の選択された器種のみが残存したのだとすれば、各地域で異形土器に対する需要のあり方に差異が生じたものと推測することができる。

したがって、各地域における一方の異形土器の消失は各地域における独自性の顕在化を反映した現象である可能性を指摘することができる。

## 5-3. 土器型式分布圏との関係

異形台付土器と釣手／香炉形土器が出現する 2 期の分布状況から、両器種は下総台地・東京湾東岸のあたりで成立した可能性が高い。

2b 期の下総台地周辺では東北に直接的な系譜を求められるような土器が出土することが知られている(秋田 2008)。異形台付土器と釣手／香炉形土器が成立した下総台地周辺は東北からの影響を受ける、土器型式間交渉の活発な地域であったことが指摘できる。

また、異形台付土器と釣手／香炉形土器が展開する北海道・東北は 2 期～3 期にかけて土器様相が斉一化する地域である(西村 2018, 印刷中)。土器型式分布圏の広域化と連動して異形土器も分布範囲を拡大していることが想定できる。

各地域で異形土器が選択的に残存し、両器種の分布範囲が大きく変化するのは 5 期である。やや先行する 4 期には、北海道と東北との間で土器様相に顕著な差異が生じる。また、関東では曾谷式と高井東式が分立する。したがって、4 期以降は日本列島東北部全域で地域性が顕在化する時期だといえる。各地域で異形土器が選択的に残存する現象は時間的にやや遅れているものの、大局的には地域性が顕在化するプロセスの中で生じたものと理解することができる。

以上のように、異形土器の出現・展開および消失は土器型式分布圏の変遷と連動しているものと考えられる。

## 6. 課題と展望

本稿では筆者の編年案に基づいて異形台付土器および釣手／香炉形土器の時空間的分布を広域的に検討した。分析の結果から、両器種の成立・展開・消長は

土器型式分布圏の変遷、地域間関係の変化と連動していることが明らかになった。

しかし、北海道・東北における 4 期以降の釣手／香炉形土器の系譜など未だ不明瞭な部分を残している。本稿では器種総体としての時空間的存在様態の把握に主眼を置いたため、個別資料の型式学的分析が十分であったとは言い難い。各地域における系統的な変遷を検証する必要があるだろう。

また、本稿では異形台付土器および釣手／香炉形土器を分析対象としたが、後期中葉から後葉にかけては下部単孔土器や宝ヶ峯型注口土器(鈴木 1997)など土器型式圏を越えて広域的に分布する遺物の存在が知られている。阿部明義が検討している微隆起線文を有する土器・土製品(阿部 2012)も同様の視点から議論すべきものである。

各種遺物を一定の基準・精度で設定された広域土器編年上に位置づけることで、広域的な地域間関係の実態を把握する一助となるだろう。

なお、本稿では異形土器の機能・用途については触れなかった。従来指摘されてきたように儀礼に関連する器物である可能性が考えられ、出土状況等から検証する必要がある。異形土器は広域的に分布するため、仮に儀礼に関連する器物なのだとすれば、広域的に何らかの儀礼行為が共有されたことを想定できる。したがって今後の儀礼行為研究には広域的な視野からのアプローチが求められる。

本稿で対象とした異形台付土器と釣手／香炉形土器が 2 期に成立・展開する背景には活発な型式間交渉と土器様相の斉一化があることを指摘した。同時期には西日本でも地域間関係の変容が指摘されており(福永 2017)、列島規模で連動した変化が生じている可能性がある。近年、島根県京田遺跡で出土した異形土器破片は関東に由来する異形台付土器である可能性が指摘されており(幡中編 2019)、分布はさらに広域化する可能性もある。同資料に付着した赤色顔料は北海道余市郡明治鉱山産の水銀朱であるという硫黄同位体分析の結果が報告されている(南・高橋 2019)。縄文時代後期の地域間関係については、今後は列島規模での検討が必要となるだろう。

## 謝辞

本稿執筆にあたり設楽博己先生より度重なるご指導を賜った。佐藤宏之先生、福田正宏先生からは演習等での発表に際して的確な助言を頂いた。また、下記の諸氏・諸機関のご助言・ご協力なくして本稿を完成させることはできなかった。東京大学考古学研究室の学兄諸氏には毎日のように議論につきあわせてしまった。末筆ではございますが、記して感謝申し上げます。

安斎正人 石川直章 伊藤格 太田圭 大塚達朗  
加藤正信 菅野紀子 工藤伸也 小泉翔太 齋藤健一  
菅谷通保 福永将大 堀江格 三浦一樹 山戸大知  
渡則子  
秋田県埋蔵文化財センター 岩手県文化振興事業団  
小樽市教育委員会 御所野縄文博物館 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 仙台市教育委員会 宝ヶ峯縄文記念館 千葉県教育振興財団 北海道埋蔵文化財センター 八戸市埋蔵文化財センター 是川縄文館 八戸市博物館 (50 音順・敬称略)

本論は科学研究費補助金特別研究員奨励費「日本列島東北部の縄文時代後・晩期における儀礼的廃棄行為の研究」(課題番号 19J14215) の成果の一部である。

## 註

- 1) 本稿でいう日本列島東北部は、北海道島および本州島の関東平野以北ならびに周辺島嶼部をさす。
- 2) かつて JD-20 住居址として報告されたが(後藤ほか 1982)、近年刊行された総括報告書の遺構番号で表記している(西野ほか編 2017)。
- 3) 加曽利 B2 式の細分はいわゆる遠部包含地の段階を新段階、それ以前を古段階としている。瘤付土器第Ⅰ段階、第Ⅱ段階の細分は小林(2015)に従った。
- 4) 2～3 期とみられる異形台付土器が「宗谷出土品」として紹介されている(宇田川編 1981)。詳細な出土地が不明であるため分析対象外としたが、分布は道北まで広がる可能性がある。

## 参考文献

- 秋田かな子 2006 「関東地方後期前・中葉にみる土器文化の展開：型式の変化と維持をめぐる」縄紋社会をめぐるシンポジウムⅣ：土器型式をめぐる諸問題 予稿集』縄紋社会研究会・早稲田大学先史考古学研究所，45-54
- 秋田かな子 2008 「加曽利 B 式土器」達雄 小林編『総覧 縄文土器』アム・プロモーション，594-603
- 阿部明義 2008 「堂林式・御殿山式土器」小林達雄編『総覧 縄文土器』アム・プロモーション，560-567
- 阿部明義 2012 「縄文後期後半の微隆起線土器の様相」『千葉大学文学部考古学研究室・考古学論攷編集委員会『考古学論攷Ⅰ：岡本東三先生退職とともに』六一書房，339-360
- 阿部芳郎 2001 「縄文時代後晩期における大形竪穴建物址の機能と遺跡群」『貝塚博物館紀要』28: 11-29
- 池上啓介 1937 「千葉縣印旛郡白井町遠部石器時代遺蹟の遺物」『史前学雑誌』9(3): 1-32
- 市川修ほか編 1974 『高井東遺跡調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告 25
- 宇田川洋編 1981 『河野広道ノート 考古篇 1』北海道出版企画センター
- 内田儀久 1977 「千葉県佐倉市井野長割遺跡出土の異形台付土器(資料紹介)」『考古学雑誌』63(3): 269-274
- 内田儀久 1978 「異形台付土器論 (Ⅰ)」『奈和』16: 14-38
- 内田儀久 1984 「異形台付土器論 (Ⅱ)」『奈和 15 周年記念論文集』奈和同人会，72-99
- 内田儀久 1985 「異形台付土器用途考 上」『奈和』23: 62-75

- 内田儀久 1986 「異形台付土器用途考 下」『奈和』24: 41-50
- 大谷敏三・田村俊之編 1982 『末広遺跡における考古学的調査(下)』千歳市文化財調査報告書 8
- 大塚達朗 2019 「京田遺跡 4 区出土の異形土器および京田遺跡の評価について」幡中光輔編『京田遺跡 4 区』出雲市の文化財報告 19，213-222
- 大野亨ほか編 2001 『酒美平遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書 88
- 岡本洋 2018 「川原平 (1)・(4) 遺跡の人面および動物意匠付土器」『青森県立郷土館研究紀要』(42): 49-54
- 小倉和重 2008 「異形台付土器」小林達雄編『総覧 縄文土器』アム・プロモーション，1076-1078
- 忍澤成視編 1999 『祇園原貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告書 5，市原市文化財センター
- 工藤信一郎ほか編 2018 『鍛冶屋敷 A 遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書 466
- 栗田則久ほか編 2006 『東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書 5：君津市鹿島台遺跡 (A 区・D 区)』千葉県教育振興財団調査報告 529
- 小平良男ほか編 1984 『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅵ：松ヶ平 A 遺跡 (第 2 次)・松ヶ平 D 遺跡・柏久保遺跡』福島県文化財調査報告書 129
- 後藤和民・庄司克・飯塚博和 1982 「昭和 48 年度 加曽利貝塚東傾斜面発掘調査概報」『貝塚博物館紀要』8: 1-21
- 小林圭一 2015 「国宝「合掌土偶」の編年の位置：風張 (1) 遺跡第 15 号竪穴住居跡出土土器の検討を通して」『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』14: 23-104
- 小林圭一 2018 「亀ヶ岡式土器とその年代観」『季刊考古学』別冊 25: 28-35
- 佐川俊一ほか編 2003 『千歳市キウス 4 遺跡 (9)』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 180
- 清水潤三・鈴木公雄 1974 『井野長割遺跡概報』佐倉市教育委員会
- 菅谷通保 1996 「南関東東部後期中葉土器群の様相」谷藤保彦・関根慎二編『第 9 回縄文セミナー 後期中葉の諸様相』縄文セミナーの会，43-92
- 杉山寿栄男編 1928 『日本原始工芸』工芸美術研究会(復刻版：1976 北海道出版企画センター)
- 鈴木克彦 1997 「注口土器の研究」『青森県埋蔵文化財センター研究紀要』2: 1-38
- 関根達人 2005 「「十腰内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ群土器」に関する今日的理解」『北奥の考古学：葛西勲先生還暦記念論文集』葛西勲先生還暦記念論文集刊行会，161-176
- 鷹野光行 1978 「いわゆる異形台付土器の変遷について」上総国分寺発掘調査団『上総国分寺発掘調査概報Ⅴ：祇園原貝塚』，58-66
- 高橋和樹ほか編 2001 『千歳市キウス 4 遺跡 (8) F・G 地区』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 157
- 高橋与右衛門ほか編 1986 『水神遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 96
- 高村勇・根本康弘編 1981 『冬木地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書：冬木 A 貝塚・冬木 B 貝塚』茨城県教育財団文化財調査報告 9
- 種市幸生ほか編 1989 『小樽市忍路土場遺跡・忍路 5 遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 53
- 種市幸生ほか編 2003 『八雲町野田生 1 遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 183

千葉正彦編 2008 『吉田館遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 520

中村耕作 2008 「釣手土器」小林達雄編『総覧 縄文土器』アム・プロモーション, 1064-1066

中村耕作編 2013 『縄文時代異形土器集成図譜Ⅰ』國學院大学文学部考古学研究室

中村耕作 2013a 「西関東・中部地方の釣手土器・異形台付土器」中村耕作編『縄文時代異形土器集成図譜Ⅰ』國學院大学文学部考古学研究室, 29-39

中村耕作 2013b 『縄文土器の儀礼利用と象徴操作』アム・プロモーション

西野雅人ほか編 2017 『史跡加曽利貝塚総括報告書』千葉市教育委員会

西村広経 2016 「東北地方の異形台付土器」『八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館研究紀要』5: 15-27

西村広経 2018 「十腰内 2 式土器の再検討」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』31: 17-46

西村広経 印刷中 「北海道島における縄文時代後期中葉の土器編年」『古代』148

野口義磨・安孫子昭二 1981 「磨消縄文の世界」野口義磨編『縄文土器大成 3: 後期』講談社, 130-135

幡中光輔編 2019 『京田遺跡 4 区』出雲市の文化財報告 19

蜂屋孝之 2004 「縄文時代後期の釣手土器」『先史考古学研究』9: 59-83

蜂屋孝之 2005 「千葉県における縄文後期の釣手土器について」『千葉県文化財センター研究紀要』24: 111-135

蜂屋孝之 2008 「異形台付土器の終焉」『千葉縄文研究』2: 51-68

蜂屋孝之 2013a 「異形台付土器の検討」中村耕作編『縄文時代異形土器集成図譜Ⅰ』國學院大学文学部考古学研究室, 18-28

蜂屋孝之 2013b 「後期の釣手土器の検討」中村耕作編『縄文時代異形土器集成図譜Ⅰ』國學院大学文学部考古学研究室, 9-17

平原信崇 2011 「縄文時代後期の東北地方における香炉形土器について」『遡行』29: 27-50

平原信崇 2013a 「東北地方の異形土器」中村耕作編『縄文時代異形土器集成図譜Ⅰ』國學院大学文学部考古学研究室, 54-64

平原信崇 2013b 「東北地方の香炉形土器」中村耕作編『縄文時代異形土器集成図譜Ⅰ』國學院大学文学部考古学研究室, 41-53

福永将大 2017 「縄文時代後期広域土器分布圏の変遷とその特質: 器種構成の時空間的検討を通して」『考古学研究』63(4): 37-59

古市豊司ほか編 1977 『水木沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書 34

南武志・高橋和也 2019 「京田遺跡 4 区出土遺物付着水銀朱の硫黄同位体分析」幡中光輔編『京田遺跡 4 区』出雲市の文化財報告 19, 165-168

宮城（蜂屋）孝之 1982 「縄文時代中期の釣手土器」『中部高地の考古学Ⅱ』長野県考古学会, 99-103

山内清男 1932 「日本遠古之文化（1）」『ドルメン』1(4): 40-43

山内清男 1940 「安行式（前半・図版 60～69）」『日本先史土器図譜 第Ⅶ輯』先史考古学会, 19-21

山内清男 1964 「文様帯系統論」『日本原始美術 1: 縄文式土器』講談社, 157-158

八幡一郎 1937 「釣手土器の型式」『人類学雑誌』52(3): 83-91

#### 異形土器出典

1: 高橋和樹ほか編 2001 『千歳市キウス 4 遺跡（8）F・G 地区』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 157

2: 佐川俊一ほか編 2003 『千歳市キウス 4 遺跡（9）』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 180

3: 西田茂ほか編 1996 『千歳市キウス 7 遺跡（3）』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 105

4: 大谷敏三・田村俊之編 1982 『末広遺跡における考古学的調査（下）』千歳市文化財調査報告書 8

5: 森田知忠ほか編 1984 『美沢川流域の遺跡群Ⅷ』北海道埋蔵文化財センター調査報告 14

6: 杉山寿栄男編 1928 『日本原始工芸』工芸美術研究会（復刻版: 1976 北海道出版企画センター）

7: 種市幸生ほか編 1989 『小樽市忍路土場遺跡・忍路 5 遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 53

8: 種市幸生ほか編 2003 『八雲町野田生 1 遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 183

9: 佐川俊一ほか編 2006 『北斗市矢不來 7 遺跡・矢不來 8 遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 232

10: 古市豊司ほか編 1977 『水木沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書 34

11: 天間勝也ほか編 1987 『大湊近川遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 104

12: 葛西勲ほか編 1993 『鞍越・爰川遺跡発掘調査報告書 1992』川内町教育委員会

13: 市川金丸ほか編 1988 『上尾駁（2）遺跡（Ⅰ）』青森県埋蔵文化財調査報告書 114

14: 遠藤正夫・白鳥文雄 1989 『二ツ石遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 117

15: 新谷武ほか 1985 『尻高（2）・（3）・（4）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 89

16: 新山隆雄ほか編 2009 『新田（Ⅰ）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 472

17: 塩谷隆正ほか編 1979 『蛭沢遺跡』青森市蛭沢遺跡調査団

18: 工藤由美子・永嶋豊 2001 『上野尻遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書 302

19: 成田正彦ほか 1988 『砂沢遺跡発掘調査報告書』弘前市教育委員会

20: 村越潔ほか編 1968 『岩木山: 岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』岩木山刊行会

21: 岡本洋ほか編 2016 『川原平（Ⅰ）遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書 564

22: 高橋哲ほか編 2017a 『川原平（Ⅰ）遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書 576

23: 高橋哲ほか編 2017b 『川原平（Ⅰ）遺跡Ⅵ』青森県埋蔵文化財調査報告書 578

24: 大野亨ほか編 2001 『酒美平遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書 88

25: 工藤竹久ほか編 1989 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ』八戸市埋蔵文化財調査報告書 27

26: 藤田亮一ほか編 1984 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書: 田面木平遺跡（Ⅰ）』八戸市埋蔵文化財調査報告書 20

27: 藤田亮一編 1991 『八戸市内遺跡発掘調査報告書 2: 風張（Ⅰ）遺跡Ⅰ』八戸市埋蔵文化財調査報告書 40

28: 小笠原善範・村木淳編 1991 『風張（Ⅰ）遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書 42

29: 村木淳・小久保拓也編 2003 『風張（Ⅰ）遺跡Ⅴ』八戸市埋蔵文化財調査報告書 97

30: 村木淳編 2008 『風張（Ⅰ）遺跡Ⅵ』八戸市埋蔵文化財調査報



- 告書 119
- 31：青森県立郷土館 1997 『馬淵川流域の遺跡調査報告書』青森県立郷土館調査報告書 40（考古 11）
- 32：鈴木克彦 2002 「風韻堂コレクションの縄文土器（1）：付風韻堂コレクション「県重宝」指定の亀ヶ岡遺跡出土資料」『調査研究年報』26、青森県立郷土館
- 33：丸山浩治編 2006 『上野場 3 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 477
- 34：星雅之・中川重紀編 2000 『長倉 I 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 336
- 35：中村絵美ほか編 2008 『板子屋敷 3 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 537
- 36：村上達夫ほか編 1983 『叭屋敷 II 遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書 47
- 37：遠藤勝博ほか編 1983 『君成田 IV 遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書 62
- 38：田鎖壽夫・斉藤邦雄編 1996 『大日向 II 遺跡：第 2 次～第 5 次調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 225
- 39：高木晃・工藤利幸編 1998 『大日向 II 遺跡発掘調査報告書：第 6 次～第 8 次』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 273
- 40：工藤利幸ほか編 1986 『馬場野 II 遺跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 99
- 41：溜浩二郎編 2009 『駒板 3 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 563
- 42：吉田充・高橋與右衛門編 1997 『柁の木遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 263
- 43：千葉正彦編 2008 『吉田館遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 520
- 44：酒井宗孝ほか 1986 『沼久保遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 109
- 45：高橋与右エ門ほか編 1986 『水神遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 96
- 46：高木晃ほか編 2012 『川目 A 遺跡第 5 次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 589
- 47：須原拓・河本純一編 2018 『浜川目沢田 I 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 689
- 48：中村良幸編 1979 『立石遺跡』大迫町埋蔵文化財報告書 3
- 49：酒井宗孝編 1997 『上鷹生遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 253
- 50：羽柴直人ほか編 2006 『河崎の柵擬定地発掘調査報告書』岩手県文化振興財団埋蔵文化財調査報告書 474
- 51：櫻田隆・長沢和則編 1995 『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 VI：寒沢遺跡』秋田県文化財調査報告書 254
- 52：菅野美香子ほか編 2011 『漆下遺跡』秋田県文化財調査報告書 464
- 53：児玉準ほか編 2002 『桐内 A 遺跡』秋田県文化財調査報告書 334
- 54：細田昌史編 2009 『二重鳥 B 遺跡』北秋田市埋蔵文化財調査報告書 11
- 55：栄一郎・築瀬圭二編 2010 『向様田 D 遺跡（第 2 次）』秋田県文化財調査報告書 452
- 56：柴田陽一郎・小林芳行 2003 『ヲフキ遺跡』秋田県文化財調査報告書 352
- 57：斎藤報恩会 1991 『宝ヶ峯』
- 58：小川淳一・高橋綾子編 2000 『王ノ壇遺跡』仙台市文化財調査報告書 249
- 59：工藤信一郎ほか編 2018 『鍛冶屋敷 A 遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書 466
- 60：手塚均ほか編 1987 『中ノ内 A 遺跡・本屋敷遺跡他：東北横断自動車道遺跡調査報告書 2』宮城県文化財調査報告書 121
- 61：大川貴弘ほか編 2015 『小山崎遺跡発掘調査報告書：総括編』遊佐町埋蔵文化財調査報告 10
- 62：森谷昌央ほか編 2003 『砂子田遺跡第 2 次・第 3 次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書 113
- 63：目黒吉明ほか編 1986 『真野ダム関連遺跡発掘調査報告 8：日向南遺跡（第 1・2 次）・岩下 D 遺跡』福島県文化財調査報告書 165
- 64：目黒吉昭ほか編 1987 『真野ダム関連遺跡発掘調査報告 IX：日向南遺跡（第 3 次）・稲荷塚 B 遺跡』福島県文化財調査報告書 182
- 65：鈴鹿良一ほか編 1990 『真野ダム関連遺跡発掘調査報告 XV：宮内 A 遺跡（第 2 次）・上ノ台 B 遺跡・上ノ台 C 遺跡・日向遺跡・日向南遺跡（第 4 次）』福島県文化財調査報告書 231
- 66：小平良男ほか編 1984 『真野ダム関連遺跡発掘調査報告 VI：松ヶ平 A 遺跡（第 2 次）・松ヶ平 D 遺跡・柏久保遺跡』福島県文化財調査報告書 129
- 67：鈴鹿良一ほか編 1988 『真野ダム関連遺跡発掘調査報告 XII：羽白 C 遺跡（第 1 次）』福島県文化財調査報告書 194
- 68：堀江格・浅野淳編 2003 『邸下遺跡：摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告 11』福島市埋蔵文化財報告書 162
- 69：押山雄三・高松俊雄編 2005 『阿武隈川築堤関連 町 B 遺跡』郡山市教育委員会
- 70：若林伸亮ほか編 1982 『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告 8：唐松 A 遺跡・又兵衛田 A 遺跡・戸屋塚群』福島県文化財調査報告書 106
- 71：福島県教育委員会 1983 『広域農業開発事業阿武隈地区遺跡分布調査報告（III）』福島県文化財調査報告書 113
- 72：滝沢規朗ほか編 2002 『元屋敷遺跡 II』朝日村文化財報告書 22
- 73：山崎忠良ほか編 2002 『元屋敷遺跡 III』朝日村文化財報告書 23
- 74：渡邊裕之ほか編 2009 『野地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 196
- 75：田中耕作・鈴木暁編 2003 二『夕子沢 C 遺跡発掘調査報告書』新発田市埋蔵文化財発掘調査報告 25
- 76：前山精明・相田泰臣編 2003 『御井戸遺跡 I』巻町教育委員会
- 77：長岡市教育委員会 1973 『馬高・三十稲場遺跡緊急調査報告書』
- 78：駒形敏朗・寺崎裕助編 1981 『岩野原遺跡』長岡市教育委員会
- 79：小林達雄ほか編 2000 『新潟県中頸城郡中郷村籠峰遺跡発掘調査報告書 II：遺物編』中郷村教育委員会
- 80：片根義幸・田代隆編 2011 『川戸釜八幡遺跡・石仏遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告 338
- 81：津野仁・塚田浩久編 2003 『荻ノ平遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告 270
- 82：進藤敏雄ほか編 2000 『御霊前遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告 236
- 83：江原英・安藤美保編 2005 『上り戸遺跡』栃木県埋蔵文化財



- 調査報告 286
- 84：若林勝邦 1894 「下野国下府所村ノ遺物埋没ノ様相及び遺物」『東京人類学会雑誌』132: 頁
- 85：
- 86：塚本師也・津野仁編 1990 『小倉水神社裏遺跡・水木東遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告 109
- 87：栃木県史編さん委員会 1979 『栃木県史 史料編考古 II』栃木県
- 88：川原由典ほか編 1984 『伯仲遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告 58
- 89：手塚達弥編 1999『藤岡神社遺跡（遺物編）』栃木県埋蔵文化財調査報告 197
- 90：初山孝行ほか編 1997 『寺野東遺跡 V(縄文時代環状盛土遺跡・水場の遺構編)』栃木県埋蔵文化財調査報告 200
- 91：江原英編 2001 『寺野東遺跡 III（縄紋時代住居跡編）』栃木県埋蔵文化財調査報告 250
- 92：佐野市史編さん委員会 1975 『佐野市史 資料編 1』佐野市
- 93：三宅敦気編 2005 『上組北部遺跡群 II 矢瀬遺跡』月夜野町教育委員会
- 94：原田恒弘ほか編 2000 『馬場東矢次 II 遺跡・新川鎬木遺跡・井出二子山古墳・保渡田八幡塚古墳』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 270
- 95：近江屋成陽 1991 『横俵遺跡群 II：大道遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 96：新藤彰 1985 『新井地区第 II 遺跡群発掘調査概報』榛東村埋蔵文化財発掘調査報告書 4
- 97：高崎市史編さん委員会 1999 『新編高崎市史 資料編 1』高崎市
- 98：大工原豊ほか編 1994 『中野谷地区遺跡群』安中市教育委員会
- 99：寺内敏郎ほか編 1988 『C7 神明北遺跡・C8 谷地遺跡』藤岡市教育委員会
- 100：桜岡正信編 2006 『小野地区水田址遺跡（社宮司 B 地点）・谷地遺跡 F 地点』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 378
- 101：茂木努・古都正志編 2002 『中栗須滝川 II 遺跡：縄文時代集落編』藤岡市教育委員会
- 102：岩崎泰一・木津博明 1999 『東長岡戸井口遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 257
- 103：沼田文男 1986 『小場遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告 35
- 104：茨城県史編さん第 1 部会原始古代史専門委員 1979 『茨城県史料 考古資料編』茨城県
- 105：汀安衛 1998 『井上貝塚発掘調査報告書』玉造町教育委員会
- 106：藤本彌城編 1980b 『那珂川下流域の石器時代研究 II』
- 107：藤本武・鈴木素行編 1994 『久慈川・那珂川流域の貝塚』藤本彌城先史資料整理調査報告書 8, 勝田市文化・スポーツ振興公社
- 108：藤本彌城編 1980a 『那珂川下流域の石器時代研究 I』
- 109：今橋浩一ほか編 1985 『外塚遺跡』下館市教育委員会
- 110：柴山正広ほか編 2009 『上境旭台貝塚』茨城県教育財団文化財調査報告 325
- 111：江原美奈子編 2012 『上境旭台貝塚 2』茨城県教育財団文化財調査報告 364
- 112：小林和彦編 2015 『上境旭台貝塚 4』茨城県教育財団文化財調査報告 397
- 113：永松実ほか編 1976 『小山台貝塚』図書刊行会
- 114：野口芳麿編 1981 『縄文土器大成 3 後期』講談社
- 115：風間和秀ほか編 1997 『片岡遺跡発掘調査報告書 3』鹿嶋市の文化財 98
- 116：川津法伸編 1998 『主要地方道つくば古河線緊急地方道路事業地内埋蔵文化財調査報告書：大橋 B 遺跡・釈迦才仏遺跡』茨城県教育財団調査報告書 131
- 117：江原美奈子・大関武編 2009 『本田遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告 313
- 118：瓦吹堅編 1977 『石畑遺跡』茨城県猿島郡五霞村教育委員会
- 119：高村勇・根本康弘編 1981 『冬木地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書：冬木 A 貝塚・冬木 B 貝塚』茨城県教育財団文化財調査報告 9
- 120：吹野富美男ほか編 1999 『伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書：前田村遺跡 G・H・I 区』茨城県教育財団文化財調査報告 146
- 121：堀孝徳編 1997 『伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 2：前田村遺跡 C・D・E 区』茨城県教育財団文化財調査報告 310
- 122：塩谷修編 2000 『国指定史跡 上高津貝塚 E 地点』土浦市教育委員会
- 123：取手市教育委員会 1983 『取手市内における重要遺跡発掘調査報告：中妻貝塚・西方貝塚・高井城址』
- 124：中妻貝塚発掘調査団 1995 『中妻貝塚』取手市教育委員会
- 125：取手市史編さん委員会 1989 『取手市史 原始古代（考古）資料編』取手市
- 126：取手市教育委員会 2004 『取手市内遺跡発掘調査報告書 8』
- 127：高木国男・小泉美明編 1987 『北方貝塚』北方貝塚遺跡調査会
- 128：杉山寿栄男編 1928 『日本原始工芸』工芸美術研究会（復刻版：1976 北海道出版企画センター）
- 129：下津屋達男・飯塚博和編 1981 『東金野井貝塚：限界確認調査概報』千葉県教育委員会
- 130：大熊佐智子ほか編 2005 『野田貝塚第 20・22 次、清水遺跡』野田市埋蔵文化財調査報告書 29
- 131：野田市郷土博物館 1999 『史跡山崎貝塚』
- 132：川根正敏ほか編 1997 『中野久木谷頭遺跡 C 地点』流山市埋蔵文化財調査報告 23
- 133：大内千年編 2001 『主要地方道松戸野田線住宅宅地関連埋蔵文化財調査報告書：流山市三輪野山貝塚・宮前・道六神・八幡前』千葉県文化財センター調査報告書 399
- 134：今泉潔編 2004 『主要地方道松戸野田線住宅宅地関連埋蔵文化財調査報告書 (2)：三輪野山貝塚・三輪野山宮前遺跡・三輪野山八幡前遺跡』千葉県文化財センター調査報告 482
- 135：石田守一編 2014 『下ヶ戸貝塚 I』我孫子市埋蔵文化財報告 48
- 136：石田守一編 2017 『下ヶ戸貝塚 IV』我孫子市埋蔵文化財報告 55
- 137：井上文男ほか編 2007 『中新宿庚申前遺跡（第 6 次）松ヶ崎城跡・松ヶ崎腰巻遺跡（第 4 次）上根郷遺跡（第 7 次）』柏市教育委員会
- 138：八幡一郎編 1973 『貝の花貝塚』松戸市文化財調査報告 4
- 139：設楽博己・峯村篤編 2004 『下水遺跡：第 1 地点発掘調査報告書』松戸市遺跡調査会
- 140：武部喜充ほか編 1985 『寺向・捕込附遺跡』松戸市営白井

聖地公園遺跡調査会

- 141：鎌ヶ谷市 1982 『鎌ヶ谷市史 上巻』
- 142：犬塚俊雄ほか編 1992 「中沢貝塚の調査」『平成3年度鎌ヶ谷市内遺跡発掘調査概報』鎌ヶ谷市埋蔵文化財調査報告7
- 143：蜂屋孝之編 2013 『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書4：市川市道免き谷津遺跡第1地点(4)』千葉県教育振興財団調査報告703
- 144：蜂屋孝之ほか編 2014 『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書5：市川市道免き谷津遺跡第1地点(3)』千葉県教育振興財団調査報告729
- 145：林克彦 2006 「大場磐雄旧蔵堀之内貝塚発見異形土器」『青山考古』2: 317-28
- 146：曾谷貝塚発掘調査団 1977 『曾谷貝塚D地点発掘調査概報』市川市教育委員会
- 147：金子裕之編 1996 『曾谷貝塚資料』山内清男考古資料7, 奈良国立文化財研究所
- 148：岡崎文喜ほか編 1982 『古作貝塚Ⅱ』船橋市遺跡調査員・古作貝塚調査団
- 149：大塚孝司ほか編 1977 『習志野市藤崎堀込貝塚』習志野市教育委員会
- 150：武藤健一・伊藤弘一編 2004 『千葉県八千代市高津館跡b地点・本郷台遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会
- 151：落合章雄編 1990 『八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡』千葉県文化財センター調査報告176
- 152：宮澤久史編 2004 『向境遺跡』八千代市遺跡調査会
- 153：山内清男ほか編 1964 『日本原始美術1』講談社
- 154：中村耕作ほか 2013 「國學院大學所蔵の異形台付土器」中村耕作編『縄文時代異形土器集成図譜Ⅰ』國學院大學文学部考古学研究室, 109-116
- 155：喜多裕明編 2011 『千葉県印西市道作1号墳(第2次)・馬場遺跡第5地点(第1次・第2次)』印旛郡市文化財センター発掘調査報告書295
- 156：小倉和重編 1998 『宮内井戸作遺跡Ⅰ地区』印旛郡市文化財センター発掘報告書136
- 157：小倉和重編 2009 『宮内井戸作遺跡』印旛郡市文化財センター発掘報告書266
- 158：内田儀久 1978 「佐倉市江原台遺跡出土の異形台付土器」『なりた』17:, 成田山靈光館
- 159：内田儀久 1977 「千葉県佐倉市井野長割遺跡出土の異形台付土器」『考古学雑誌』63(3): 269-274
- 160：田中大介・小倉和重編 2004 『平成15年度佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書：井野長割遺跡(第8次)』佐倉市教育委員会
- 161：小倉和重・高谷英一編 2015 『井野長割遺跡(第1次・第2次)発掘調査報告書』印旛郡市文化財センター発掘調査報告書344
- 162：池上啓介 1937 「千葉縣印旛郡臼井町遠部石器時代遺蹟の遺物」『史前学雑誌』9(3): 1-32
- 163：沼沢豊ほか編 1978 『佐倉市飯合作遺跡』佐倉市振興協会・千葉県文化財センター
- 164：近森正ほか編 1983 『佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要Ⅱ』佐倉市遺跡調査会
- 165：林田利之編 2000 『吉見台遺跡A地点』印旛郡市文化財センター発掘調査報告書159
- 166：野口行雄ほか 2014 『物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書：四街道市御山遺跡(2)』千葉県教育振興財団調査報告726
- 167：米内邦雄・宮入和博編 1972 『千代田遺跡』四街道千代田

遺跡調査会

- 168：池田大助・宮重行編 2016 『四街道市嶋越遺跡(2)：旧石器時代～弥生時代編』千葉県教育振興財団調査報告749
- 169：古谷渉・田中英世編 2001 『千葉市内野第1遺跡』千葉市埋蔵文化財センター
- 170：西野雅人ほか編 2017 『史跡加曽利貝塚総括報告書』千葉市教育委員会
- 171：田中英世編 2007 『千葉市芳賀輪遺跡』千葉市教育委員会
- 172：田中英世・中山貴正編 2003 『千葉市平和公園遺跡群Ⅰ：多部田貝塚 貝殻塚遺跡 ムグリ遺跡』千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター
- 173：米田耕之助 1977 「千葉県六通貝塚出土の台付異形土器」『古代』62: 22-24
- 174：西野雅人編 2007 『千葉東南部ニュータウン：六通貝塚』千葉県教育振興財団調査報告572
- 175：近藤敏編 1987 『菊間手永遺跡』市原市文化財センター調査報告書23
- 176：忍澤成視編 1999 『祇園原貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告書5, 市原市文化財センター
- 177：忍澤成視編 1995 『能満上小貝塚』市原市文化財センター調査報告書55
- 178：安井健一ほか編 2005 『市原市西広貝塚Ⅱ』市原市文化財センター調査報告書93
- 179：鶴岡英一ほか編 2007 『西広貝塚Ⅲ』上総国分寺台遺跡調査報告17, 市原市文化財センター
- 180：伊藤智樹編 2005 『市原市石神台遺跡』千葉県文化財センター調査報告524
- 181：小牧美知枝編 2010 『野毛平東方遺跡 野毛平上之内遺跡 野毛平泉台1遺跡 野毛平泉台2遺跡』印旛郡市文化財センター発掘調査報告書280
- 182：小川博和 1975 「成田市における縄文時代後期の遺跡群」『奈和』14: 頁
- 183：鈴木圭一編 1995 『小菅法華塚Ⅰ・Ⅱ遺跡』印旛郡市文化財センター発掘調査報告書92
- 184：加藤修司ほか編 2007 『東関東自動車道水戸線酒々井PA埋蔵文化財調査報告書4：酒々井町墨古沢遺跡 旧石器・縄文時代編』千葉県教育振興財団調査報告570
- 185：鳥立圭・遠藤雄一郎編 2006 『大滝遺跡・上貝来土遺跡・貝来土遺跡』山武郡市文化財センター発掘調査報告書91
- 186：芝山町史編さん委員会 『芝山町史 資料集1 原始古代編』芝山町
- 187：中野修秀編 1995 『居合台遺跡』山武郡市文化財センター発掘調査報告書26
- 188：能城秀喜 1986 「千葉県香取郡小見川町良文貝塚出土の考古資料：田中量裕氏寄贈遺物の紹介」『大正史学』16: 1-29
- 189：國學院大學考古学資料館 1986 『余山貝塚資料図譜』
- 190：岡崎文喜・新津健編 1978 『八祖遺跡』八祖遺跡調査団
- 191：宮重行編 1987 『主要地方道成田松尾線V』千葉県文化財センター
- 192：菅谷通保ほか編 2003 『千葉県茂原市下太田貝塚』総南文化財センター調査報告50
- 193：安井健一編 2010 『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書10：袖ヶ浦市上宮田台遺跡2(旧石器・縄文時代)』千葉県教育振興財団調査報告書638
- 194：吉野健一編 2006 『東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書7：君津市三直貝塚』千葉県教育振興財団

- 調査報告 533
- 195：栗田則久ほか編 2006 『東関東自動車道（木更津・富津線）埋蔵文化財調査報告書 5：君津市鹿島台遺跡（A 区・D 区）』千葉県教育振興財団調査報告 529
- 196：栗田則久ほか編 2009 『東関東自動車道（木更津・富津線）埋蔵文化財調査報告書 12：君津市鹿島台遺跡（C 区）』千葉県教育振興財団調査報告 614
- 197：山田常雄 1983 「千葉県君津市豊田出土の異形土器について」『千葉史学』3: 86-89
- 198：村田章人 1993 『原ヶ谷戸・滝下』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 127
- 199：古池晋禄・青木克尚編 1997 『深谷市内遺跡 IX：上敷免遺跡（第 8 次）・上敷免北遺跡（第 4 次）』埼玉県深谷市内埋蔵文化財発掘調査報告書 53
- 200：黒坂禎二編 2002 『池上／諏訪木』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 283
- 201：渡辺清志編 2007 『諏訪木遺跡 II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 336
- 202：赤熊浩一ほか編 2014 『長竹遺跡 I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 413
- 203：吉田稔・渡辺清志編 2018a 『長竹遺跡 II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 440
- 204：吉田稔・渡辺清志編 2018 『長竹遺跡 III』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 441
- 205：新屋雅明編 1988 『赤城遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 74
- 206：富田和夫・細田勝編 1989 『中三谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 76
- 207：久喜市史編さん委員会 1988 『久喜市史』久喜市
- 208：細田勝編 2018 『小林八束 1 遺跡 II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 442
- 209：市川修ほか編 1980 『下栢間遺跡』埼玉県遺跡調査会報告 42
- 210：鈴木敏昭ほか編 1983 『皿沼遺跡』白岡町文化財調査報告書 1
- 211：末木啓介・藤沼昌泰編 2005 『後谷遺跡：第 4 次発掘調査調査報告書』桶川市教育委員会
- 212：市川修ほか編 1974 『高井東遺跡調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告 25
- 213：橋本勉編 1990 『雅楽谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 93
- 214：上野真由美・渡辺清志編 2007 『雅楽谷遺跡 II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 307
- 215：田中和之・小宮雪晴編 2007 『帆立山遺跡』埼玉県蓮田市文化財調査報告書 44
- 216：斎藤稔・西川制編 1985 『雷電池並びに周辺調査報告書 考古・自然・歴史民俗』鶴ヶ島町脚折遺跡群発掘調査団・鶴ヶ島町教育委員会
- 217：斎藤稔・早川由利子編 1997 『鶴ヶ島中学西遺跡発掘調査報告書』鶴ヶ島市教育委員会
- 218：富元久美子編 1995 『飯能の遺跡 19：化能里遺跡第 10 次調査報告』飯能市教育委員会
- 219：三田村美彦編 1990 『小深作遺跡発掘調査報告 第 3 次調査』大宮市文化財調査報告 28
- 220：山内清男ほか編 1964 『日本原始美術 1』講談社
- 221：島村芳裕ほか編 2010 『岩槻城跡（二の丸跡第 3 地点）発掘調査 黒谷貝塚前遺跡（第 1 地点）』さいたま市埋蔵文化財調査報告書 5
- 222：早川智明ほか編 1984 『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書』埼玉県教育委員会
- 223：青木義脩ほか編 1985 『馬場小室山遺跡（第 9 次）』浦和市遺跡調査会報告書 5
- 224：さいたま市遺跡調査会 2002 『櫛谷遺跡（第 9・10 次）・南方遺跡（第 5・6 次）・南方西台遺跡（第 2 次）・行谷遺跡（第 3 次）』さいたま市遺跡調査会報告書 4
- 225：新屋雅明 2000 『石神貝塚』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 254
- 226：大屋道則・大谷徹 2015 『清左衛門遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 416
- 227：西澤明ほか編 2011 『西ヶ原貝塚』東京都埋蔵文化財センター調査報告 262
- 228：Morse, E.S. 1879 Shll Mounds of Omori. Memoirs of the Science Department, University of Tokyo 1(1)（再録：E.S. モース（近藤義郎・佐原真訳）1977 『『大森貝塚』（東京大学理学部紀要 第 1 巻第 1 冊 1879）』『考古学研究』24(3-4): 1-50
- 229：山内清男ほか編 1964 『日本原始美術 1』講談社
- 230：千葉俊朗・戸沢充則編 2006 『下宅部遺跡 1』東村山市教育委員会
- 231：指田政明ほか編 2004 『吉祥山：武蔵村山市吉祥山遺跡発掘調査報告』株式会社四門
- 232：安孫子昭二ほか編 1971 『平尾遺跡調査報告 1』平尾遺跡調査会
- 233：永峰光一・安孫子昭二編 1972 『鶴川遺跡群』町田市教育委員会
- 234：八幡一郎ほか編 1984 『なすな原遺跡：No.1 地区調査』なすな原遺跡調査会
- 235：浅川利一ほか編 2010 『田端東遺跡』町田市教育委員会
- 236：石井寛編 2008 『華蔵台遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 41, 横浜市教育委員会
- 237：岩崎祥・白崎智隆編 2007 『池端・金山遺跡』埋蔵文化財発掘調査支援協同組合
- 238：日本窯業史研究所 2010 『池端・金山遺跡第 2 地点』日本窯業史研究所報告 74
- 239：秋田かな子編 1991 『王子ノ台遺跡』東海大学校地内遺跡報告 2
- 240：秦野市教育委員会 2011 『太岳院遺跡：2006-02 地点』秦野市教育委員会
- 241：戸田哲也ほか編 2010 『神奈川県秦野市平沢道明遺跡発掘調査報告書（2004-04 地点・2004-05 地点）』秦野市教育委員会・玉川文化財研究所
- 242：平野修ほか編 1999 『上ノ原遺跡』上ノ原遺跡発掘調査調査団
- 243：櫛原功一編 1987 『姥神遺跡』大泉村埋蔵文化財調査報告 5
- 244：三村竜一ほか編 2017 『長野県松本市エリ穴遺跡発掘調査報告書：遺構編 1』松本市文化財調査報告 228
- 245：三村竜一ほか編 2018a 『長野県松本市エリ穴遺跡発掘調査報告書：遺構編 2』松本市文化財調査報告 228
- 246：三村竜一ほか編 2018b 『長野県松本市エリ穴遺跡発掘調査報告書：遺物編 1』松本市文化財調査報告 228
- 247：三村竜一ほか編 2019 『長野県松本市エリ穴遺跡発掘調査報告書：遺物編 2』松本市文化財調査報告 228



- 248：穂高村教育委員会 1972 『離山遺跡』穂高村教育委員会  
249：友野良一ほか編 1990 『中越遺跡発掘調査報告書』宮田村教育委員会  
250：大桑村教育委員会 1988 『大明神遺跡』大桑村教育委員会  
251：馬場保之ほか編 2011 『中村中平遺跡 遺物編』飯田市教育委員会

#### 図版出典

図1～2・9・10：筆者作成

図3：1・2・7（種市ほか編1989）、3（杉山編1928）、4（西田ほか編1996）、6（佐川ほか編2006）、8（大谷・田村編1982）

図4：1（工藤ほか編1989）、2（吉田・高橋編1997）、3～5（中村編1979）、6・9・28（菅野ほか編2011）、7（藤田編1991）、8（柴田・小林編2003）、10・13・15・16（高木編2012）、11（鈴鹿ほか編1988）、12・17・18（押山・高松編2005）、14・21（齋藤報恩会1991）、19・31（目黒ほか編1987）、20（工藤ほか編2018）、22（羽柴ほか編2006）、23（櫻田・長澤編1995）、24（古市ほか編1977）、25・26（星・中川編2000）、27（千葉編2008）、29（手塚ほか編1987）30（田鎖・齋藤編1996）

図5：1（沼田編1986）、2（近森ほか編1983）、3（秋田編1991）、4・5（永峰・安孫子編1972）、6（市川ほか編1974）、7・8（西

野ほか編2017）、9（三村ほか編2018b）、10・11（内田1977）、12・15・20・21（吉野編2006）、13（安孫子ほか編1971）、14・17（忍澤編1999）、16（末木・藤沼編2005）、18（八幡編1973）、19（江原・大関編2009）、22（永松ほか編1976）、23（小倉編2009）、24・25（池田・宮編2016）

図6：1・6～8（種市ほか編1989）、2・4（佐川ほか編2003）、3・5・10～15（高橋ほか編2001）、9（森田ほか編1984）

図7：1（大野ほか編2000）、2（菅野ほか編2011）、3・4・7（高木編2012）、5（大川ほか編2015）、6（小平ほか編1984）、8（小川・高橋編2000）、9（千葉編2008）、10（若林ほか編1982）、12・15（古市ほか編1977）、13（福島県教育委員会1983）、14（柴田・小林編2003）、16（押山・高松編2005）、17（遠藤ほか1983）、18（天間ほか1987）、19（村木・小久保編2003）、20（齋藤報恩会1991）、21（藤田編1991）、22・23（高木・工藤編1998）、24（高橋ほか編1986）、25（岡本ほか編2016）

図8：1（高村・根本編1981）、2・4（市川ほか編1974）、3（馬場ほか編2011）、5（齋藤・早川編1997）、6（小倉編1998）、7（小倉・高谷編2015）、8（吉田・渡辺編2018a）、9（小倉編2009）、10（栗田ほか編2009）、11（栗田ほか編2006）、12・14（忍澤編1999）、13（安井ほか編2005）

## **Wide Distribution of Irregular Shaped Pottery of the Late Jomon Period in Northeast Japan**

Hirotsune NISHIMURA

Some types of irregular shaped pottery of the Late Jomon period widely spread in Northeast Japan. Although wide distributions of the pottery possibly indicate regional relations, not so many studies focused on regional comparisons because of the inadequate wide-range pottery chronology. This paper focuses on the tempo-spatial distributions of irregular shaped pottery and discusses the regional relations based on the wide-range pottery chronology the author proposed. The targets of this study are two types of pottery. One is irregular shaped pottery with pedestal and another is lantern or censer shaped pottery. They were developed in the Kasori-2 phase around Shimosa Plateau and widely spread from Central Hokkaido to Chubu Highland in a short span. Until the Soya phase both of them maintained wide distributions. Nevertheless lantern or censer shaped pottery disappeared in Kanto and the other did in Tohoku after the Angyo-1 phase. Both of the pottery were developed in the wide-range relations and disappearances of each had correlations with rising of the regional characteristics. Thus the developments, wide spreads and disappearances of the irregular shaped pottery show the transitions of regional relations.